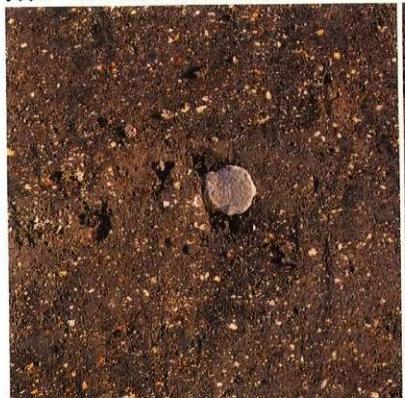


写真27 坂元 A 遺跡 石器出土状況



打製石斧（84）出土状況



石器（90）出土状況



打製石斧（83）出土状況



石磨丁（91）出土状況

写真28 坂元A遺跡 6a・b層の水田跡



6a・b層の水田跡（東ブロック）



6a・b層の水田跡（H・I-8・9区）



H-8区6b層下部の手づくね土器（71）出土状況
この地点では擬似畦畔Bを検出した

6a・b層の水田跡水口状遺構

写真29 坂元A遺跡 6a・b層の水田跡



6a・b層の水田跡 (F・G-6・7区)



6a・b層の水田跡
擬似畦畔B断面
(G-7区・東壁)



6a・b層の水田跡 (F・G-8・9区)

写真30 坂元A遺跡 5e層の溝状遺構S D12と杭列



5e層の落ち込み（SD12）と杭列
(H-10区)



杭列の出土状況
(H-10区)



杭列の出土状況
(G-10区)

写真31 坂元A遺跡 5c層の水田跡



5c層の水田跡 (K・L-3区)



5c層の段差及び攪拌された5d層の
土層断面 (L-3区・南壁)



土師器杯 (98) 出土状況

写真32 坂元 A 遺跡 5 b 層の水田跡



5 b 層の水田跡（西ブロック）



5 b 層の水田跡と SD13
(東ブロック)



SD13の断面 (F - 7 区・東壁)

写真33 坂元A遺跡 中世前期の小ピット（足跡状遺構）



小ピット（足跡状遺構）検出状況



牛の足跡検出状況



牛の足跡完掘状況



牛の足跡完掘状況



小ピット（足跡状遺構）
完掘状況（K-3・4区）

写真34 坂元A遺跡 桜島文明軽石降下後の水田跡



桜島文明軽石降下後の水田跡
検出状況（東ブロック）



4層（桜島文明軽石）を除去した状態
(西ブロック)



4層（桜島文明軽石）を除去した状態
(1-7・8区)

写真35 坂元A遺跡 桜島文明軽石降下後の擬似珪畔B断面



桜島文明軽石降下後の
擬似珪畔B断面（G-10区・東壁）



桜島文明軽石降下後の
擬似珪畔B断面（G-8区）



4層（桜島文明軽石）を除去した状態
(H-8区)



4層（桜島文明軽石）を除去した状態
(H-8区)

写真36 坂元A遺跡 繩文時代晚期土器

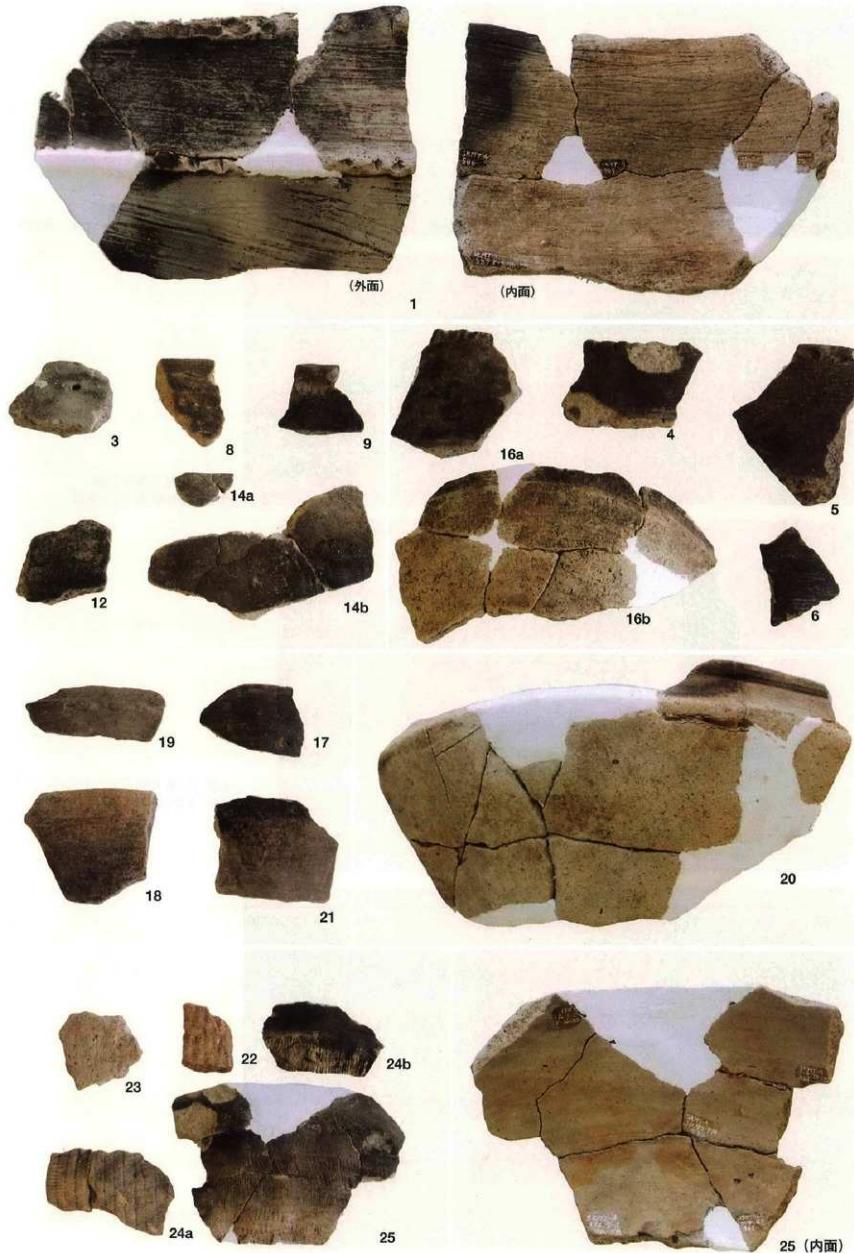


写真37 坂元A遺跡 弥生時代～古墳時代前期の遺物



写真38 坂元A遺跡 石器



打製石斧



石包丁



剥片石器



打製石核・石核未成品



その他の石器



写真39 坂元A遺跡 古墳時代の土器と平安時代の土器



古墳時代の土器



古墳時代の土器



平安時代の土器

写真40 坂元A遺跡 中世の遺物



写真41 坂元A遺跡 貿易陶磁器



白磁・青白磁

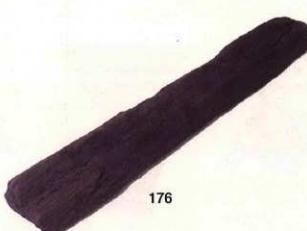


青磁



白磁

写真42 坂元 A 遺跡 木製品

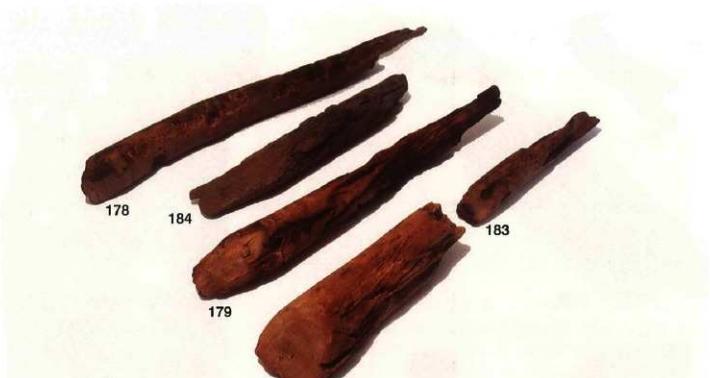


6 e層出土木製品 (167)

写真43 坂元A遺跡 6e層出土木製品



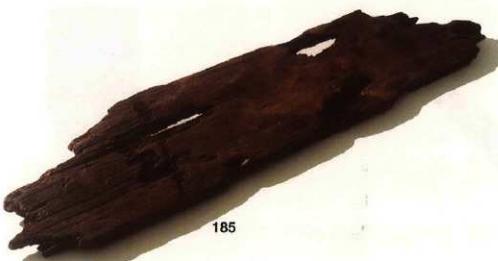
写真44 坂元A遺跡 5e層出土木製品



杭



杭の加工痕



板状木製品

第6章 坂元B遺跡の成果

第3節 発掘調査の方法と概要

調査対象地の現況は大半が水田であるが、低位段丘3面(t_3)側に近い一部(後述する西プロックの東南部)が竹やぶとなっていた。標高は約147~146mである。発掘調査に際しては、地形とは無関係に、公共座標系のS N座標線に一致したメッシュを設定(10m×10mを1単位とする調査区を設定)し、東西方向を算用数字で、南北方向をアルファベットで表記し、その組み合わせで区名を付けた。また、南北方向に走行する現在の用排水路によって調査区域が2分されたため、便宜的に水路より東側の地点を東プロックとし、西側の地点を西プロックとした。調査期間は平成13年1月15日から平成13年3月29日まで、約6,900m²を対象に実施した。

平成11年の宮崎県教育委員会による確認調査では、地表下約1mで霧島御池軽石に達し、同テフラ上位に堆積する黒色土から弥生時代~中世の遺物が出土し、同テフラの直上でピットなどの遺構が確認されたという。そこで、現耕作上を重機によって剥ぎ取り、仮置きした後、さらに、黒色土上面まで重機によって掘り下げた。ただし、西プロックの北東端では、調査区域の一部でとらえることができた桜島文明軽石(P3:15世紀後半)を埋土とする小溝状遺構群をとらえたため、この区域だけは同軽石の上面でいったんとめて、小溝状遺構の精査を行ってから、下層を掘り下げた。東プロックは、調査区域の北壁に沿って幅約1mの排水溝を兼ねた深掘りトレンチを入れ、土層の堆積状況を確認した。遺構については、霧島御池軽石層及びその上位に堆積する同軽石の風化・土壤化層で検出した。弥生時代の竪穴住居跡(SA1)調査の際には、水が湧いて、床面の精査とピット(柱穴)掘り下げが困難となったため、やむをえず、排水溝を兼ねた住居の断ち割り溝を掘削して、水を排出し調査を続けた。

また、黒色土を掘り下げる過程で、東プロックの北東側に2箇所、西プロックの西南側に1箇所の深い谷地形が入り込んでいることが判明した。それらの地点には泥炭層が形成されているが、湧水が著しいため、全面的に掘り下げるることを断念し、部分的にトレンチを入れることによって、土層確認と分析試料のサンプリングを実施した。出土遺物は通し番号を付けて随時トータルステーションを用いて取り上げた。

自然科学分析については、植物珪酸体分析等を実施したが、霧島御池軽石の上位に堆積する黒色土(VI層)が褐色化した地点があったため、その地点については、成因を調べるための土壤分析を試みた。

調査の結果、遺構は、縄文時代の溝状遺構1条と土坑2基、弥生時代の竪穴住居跡2軒・土坑3基・土器埋納遺構(土坑含む)2基、平安時代の溝状遺構8条・掘立柱建物跡3棟・土坑15基、中世の溝状遺構1条・掘立柱建物跡5棟・土坑3基・道路状遺構2条・小溝状遺構の確認された地点2ヶ所、近世の溝状遺構1条・掘立柱建物跡1棟・土坑3基が検出された。遺物は縄文時代~弥生時代の土器・石器、平安時代~中世の土器・陶磁器・石器・鉄製品・木製品、近世の陶磁器・鉄製品・木製品などが出土した。中でも、弥生時代の竪穴住居跡から完形の土器が多数見つかった他、これまで、当地域において出土事例の少なかった島津莊立莊(11世紀代)の土器や貿易陶磁器がセットで見つかったことなどが特筆できる。

第2節 遺跡の層序

遺跡の基本層序について、図63に調査区域内の2つのパターンを模式化してみた。左側は、下位に霧島御池軽石が確認できる地点であり、右は、霧島御池軽石及びその上位に堆積する土層を削剥して深い谷が入り込み、そこに泥炭層が形成される地点である。以下、各層の説明を行う。

I層は褐灰色シルト土(黄色軽石と風化疊合む)。昭和30年代の耕地整理の盛土を含む現代の耕作土である。

IIa層は暗赤褐色シルト土(白色軽石含む・酸化鉄の沈着著しい)。I層の水田基盤層となる。近代の水田層。

IIb層は褐灰色シルト土(白色軽石含む)。近世から近代にかけての水田層。

V層は黒褐色弱粘質シルト土（白色軽石含む）。近世の遺物包含層。

VI層は灰白色軽石（桜島文明軽石・P 3 : 15世紀後半）。攪拌されて、下層の黑色土ブロック含む。

Va層は黒色弱粘質シルト土（黄色軽石含む）。中世前期の遺物包含層。

Vb層は黒褐色弱粘質シルト土（場所によっては黄色軽石を多量に含む）。中世前期の遺物包含層。

Vc層は黒褐色（褐灰色）弱粘質シルト土（黄色軽石含む）。平安時代の遺物包含層。

VI層は黒色弱粘質シルト土（黄色軽石含む）。西ブロックの南部や東ブロックの中央部など、場所によっては、色調が明るく変化し、褐色弱粘質シルト土となる。その地点においては、下層のVa層との層界が入り組んで、不明瞭となる。弥生時代～古墳時代の遺物包含層。

VIIa層は黒色シルト土（黄色軽石含む）。縄文時代後～晩期の遺物包含層。

VIIb層は黒褐色シルト土（黄色軽石多く含む ザラザラしている。霧島御池軽石の風化・土壤化層。

VIII層は浅黄色軽石（霧島御池軽石：約4200年前）。この軽石層は、安定した低位段丘上や成層シラス台地上では、黄橙色を呈するが、坂元B遺跡の大半の地点では地下水の影響により、灰白色化している。

V層（霧島御池軽石）より下位は、深掘りの仮排水溝の断面で確認した結果、黒色粘質土（泥炭質）、灰白色シルトの順に堆積していることが判明した。

なお、浅い谷の形成される地点では、Vc層の下位に、黒色粘質土、暗褐色粘質土からなる泥炭層（樹木の幹・枝・葉・種実などを多く含む木本質）が形成される。2ヶ所の地点でその泥炭層から採取した樹木（コナラ属アカガシシ属）について、放射性炭素年代測定を実施した結果、M-3区で 1080 ± 50 年BP、B-11区で 1110 ± 50 年BPという数値が得られた。

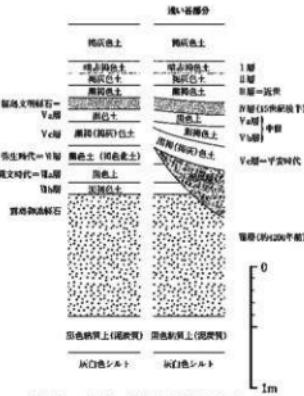
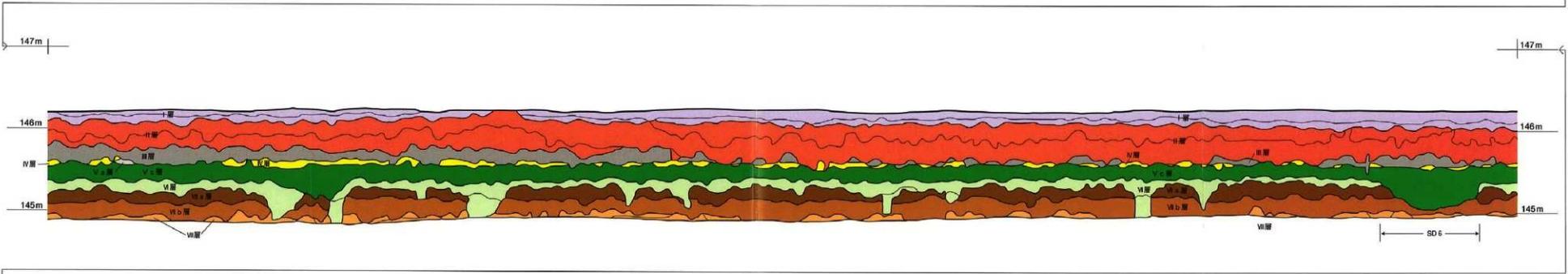
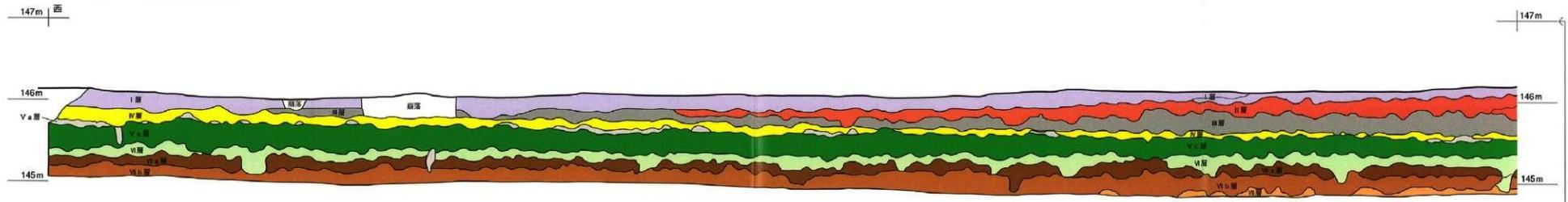


図63 坂元B遺跡土層柱状模式図



図64 坂元B遺跡土層断面図作成ライン

東ブロック北壁土層断面図A



坂元B遺跡土層説明

I層：褐色色シルト土（黄色鉄石と風化礫を含む）
IIa層：錆赤褐色シルト土（白色鉄石含む 鉄化鉄の沈着著しい）
IIb層：錆褐色シルト土（白色鉄石含む）
III層：黒褐色鉄質シルト土（白色鉄石含む）
IV層：灰色鉄石（埋没され、下の黑色土ブロック全石）
—【桜島文明鉄石（15世紀後半）の2次堆積】

V-a層：黒色鉄質シルト土（黄色鉄石含む）
V-b層：黒褐色鉄質シルト土（黄色鉄石含む 場所によっては黄色鉄石を多量に含む）
V-c層：黒褐色（褐色） 泥炭質シルト土（黄色鉄石含む）
+V-d層：2つの黒褐色土・白色鉄石を多く含む土層（泥炭の幹・茎・葉なども含む本木質）が形成される
VI層：黒色鉄質シルト土（白色鉄石含む）
VII層：黒褐色シルト土（黄色鉄石多く含む ザラザラしている）
VIII層：浅灰色砂岩（桜島噴出物 約4200年前）

*V層より下位は黒色粘質土、灰白色シルト土の間に接続

[SD 7堆土]
■ 黒色粘質土層
□ 靴石混じりの砂層

[V-c層とV層の間に形成される泥炭質層]
■ 黑色泥炭層
■ 黑褐色泥炭層
■ 細褐色泥炭層
■ 桜島噴出物の荷残層

0 5m

東ブロック北壁土層断面図B

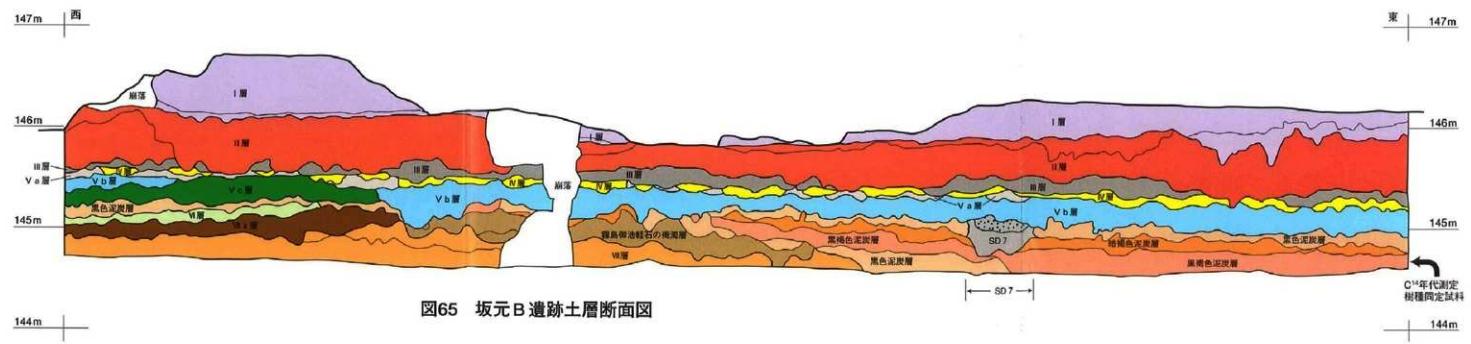
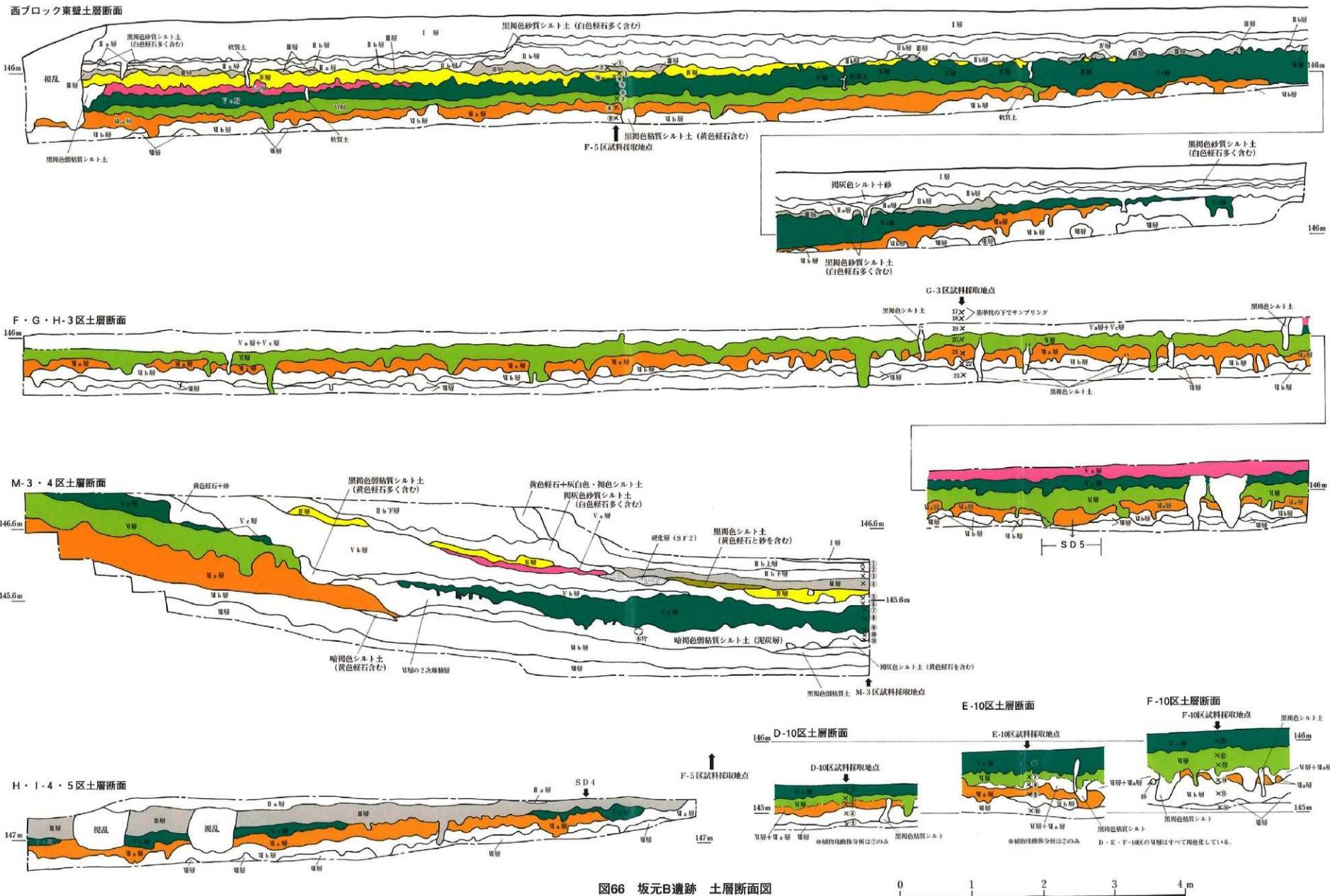


図65 坂元B遺跡土層断面図



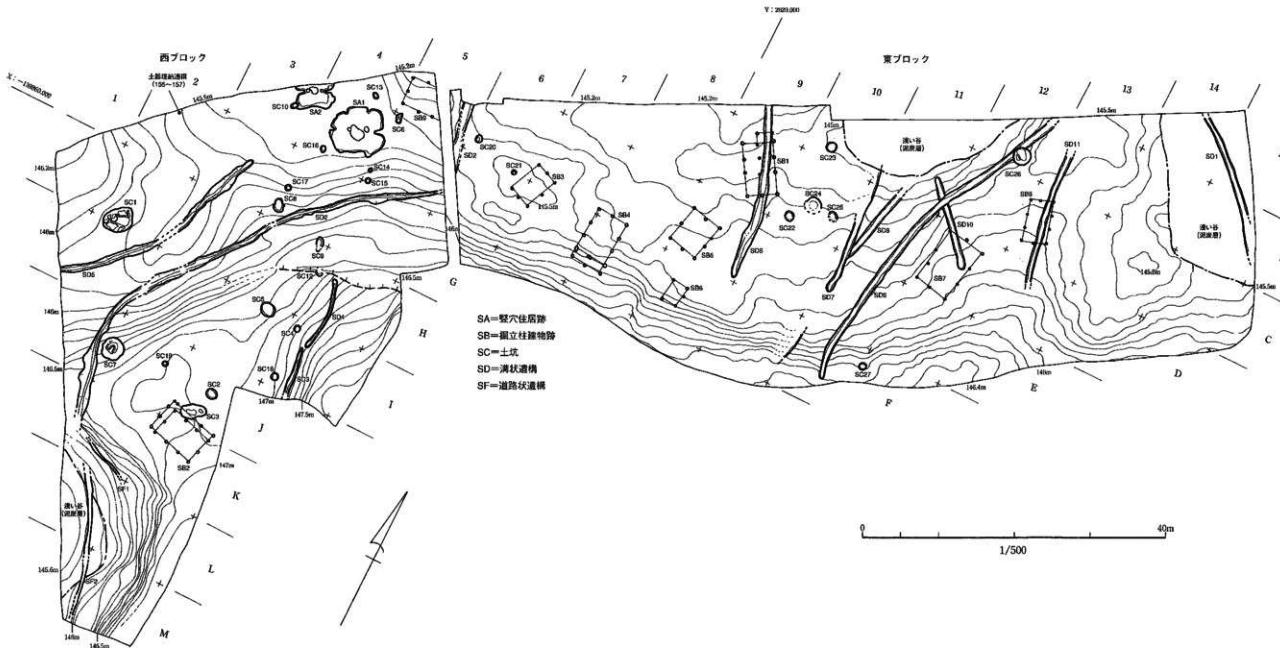


図67 坂元B遺跡主要遺構全体図

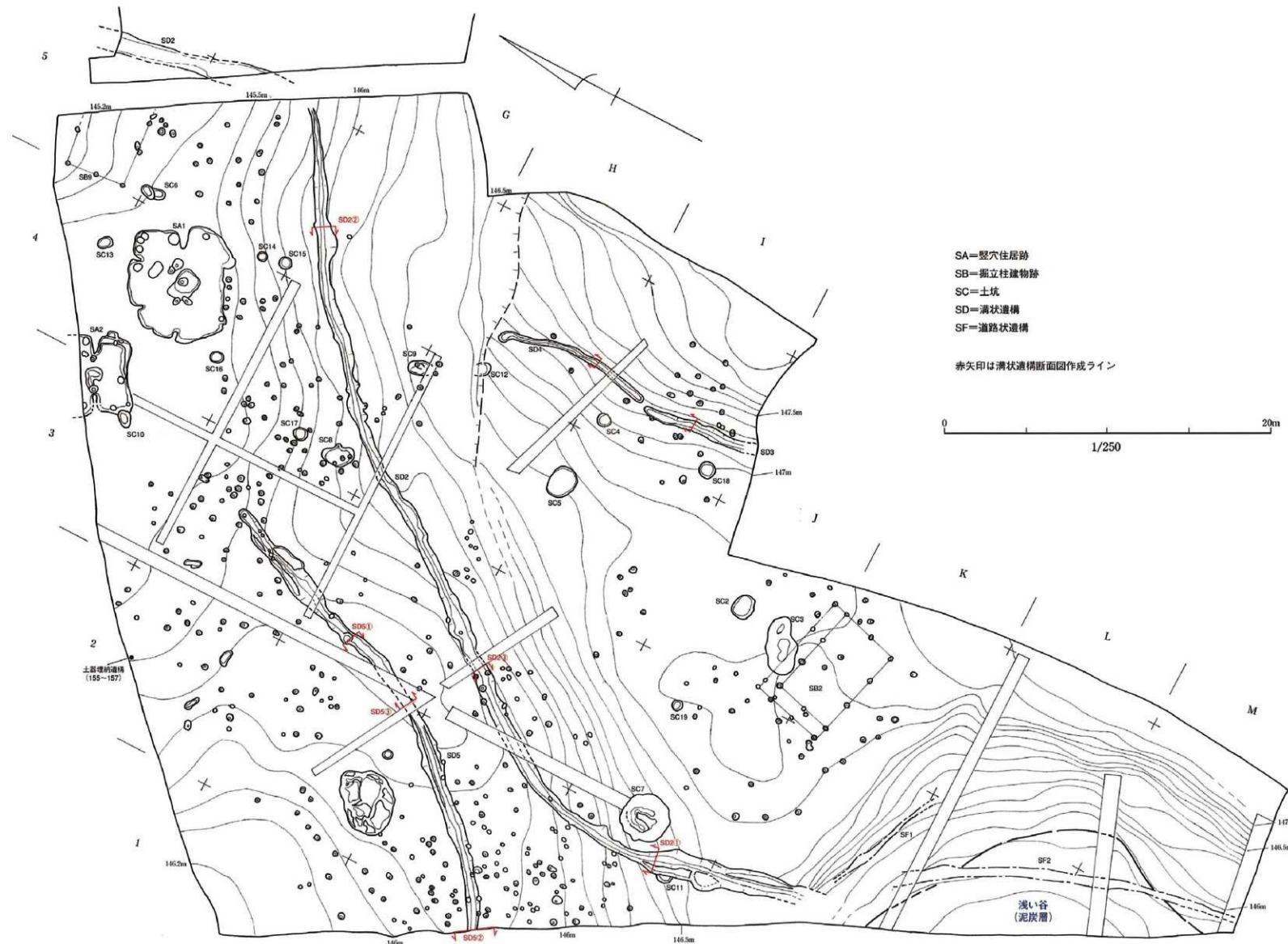


図68 坂元B遺跡 西ブロック遺構平面図

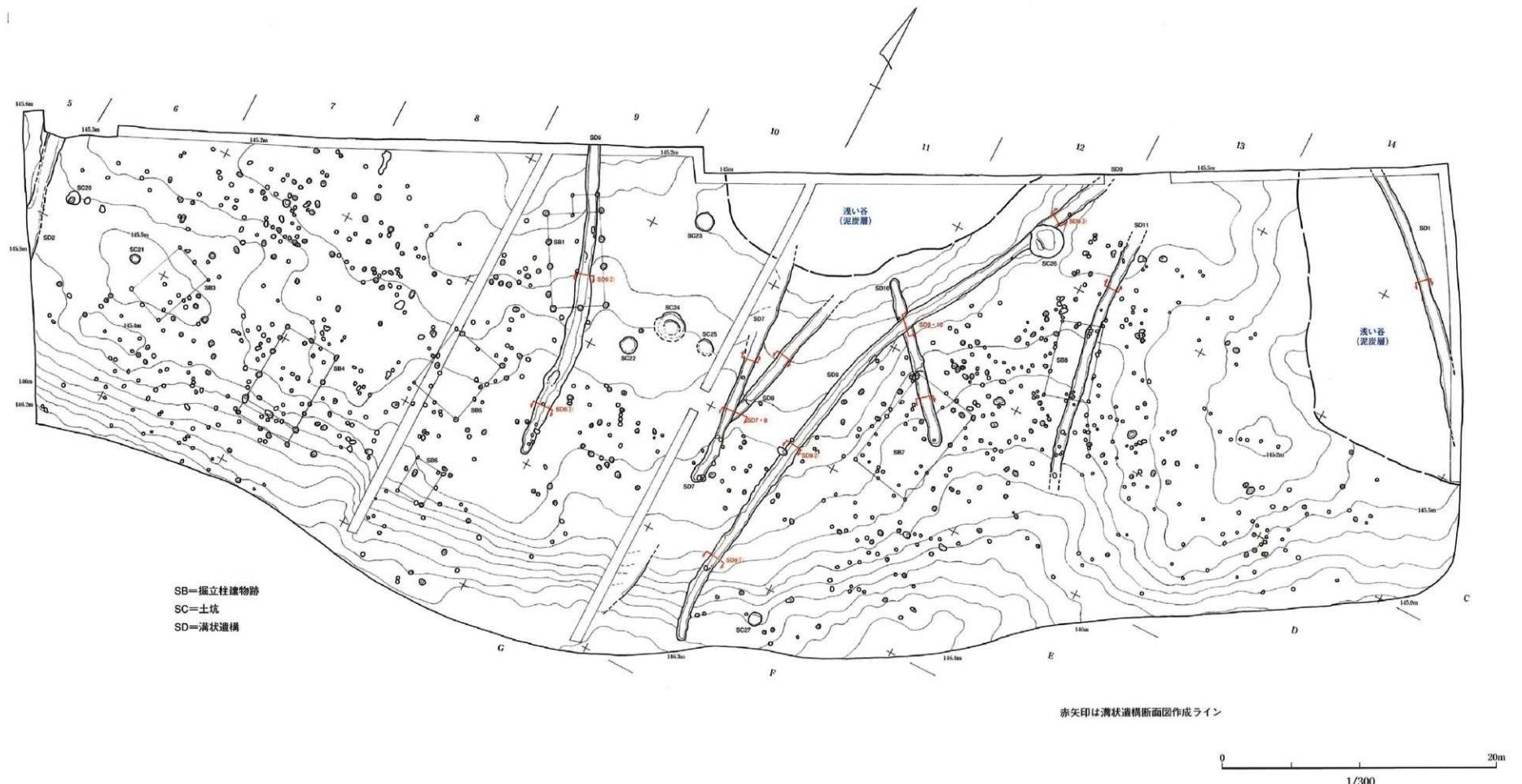


図69 坂元B遺跡 東ブロック遺構平面図

第1節 各時代の調査成果

(1) 縄文時代～古墳時代

1. 縄文時代の遺構

●溝状遺構 (図68・図72)

S D 5は西プロック西側で検出された。G-3区からはじまって、北東から南西へ向かって弧を描くようにして走行し、さらに西側へと延びるが、それ以上は調査区域外のため追求することができなかった。幅1.6～0.6m、深さ30～20cm。霧島御池軽石上面の等高線をみると、この溝状遺構は、北から西へ向かう窪地状となる地形の底に掘られていると考えられる。埋土は黒色シルト土（黄色軽石を含む）であり、H-2・3区における上層断面観察の結果、この溝状遺構はⅦ b層を掘り込んでつくられ、Ⅶ層よりも下位のⅦ a層が埋土となっていることが判明した。同断面では、栽培植物の有無を視野に入れて、植物珪酸体分析を実施した結果、埋土（Ⅶ a層）からはイネが検出されなかった、しかしながら、上位のⅦ層からは、他の地点と比べると比較的高い密度でイネが検出された。遺物は、縄文時代晚期の土器が出土している。一部、上層（Ⅶ層）からの落ち込みに伴うものと思われる弥生土器などもみられる。1は深鉢の胴部で外面に弱い稜線が入る。外面はにぶい赤褐色を呈し、内面は褐灰色を呈する。外面には一部に横方向のミガキが施されている。浅鉢は摩滅が著しい。3・4は浅鉢である。褐灰色を呈し、器面は内外面ともに丁寧なミガキが施されている。浅鉢は他にも数点出土しているが、いずれも摩滅が著しい。2は鉢の底部である。外面に網目の圧痕がある。明黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含むため、器面がザラついている。

●土坑 (図68・図73)

土坑は西プロックにおいて、2基が検出された（SC 8とSC 19）。いずれもⅦ a層に該当する黒色シルト土を埋土としているが、内部から出土遺物は確認できなかった。SC 8は、平面プランは不整形である。長軸約1.92m、短軸約1.25m、深さ約24cm。SC 19は、平面プランが楕円形を呈する。長径約66cm、短径約55cm、深さ約10cm。

2. 包含層出土の縄文土器 (図74～76)

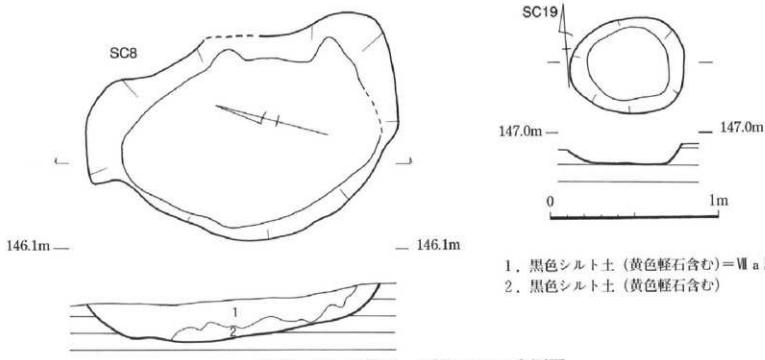
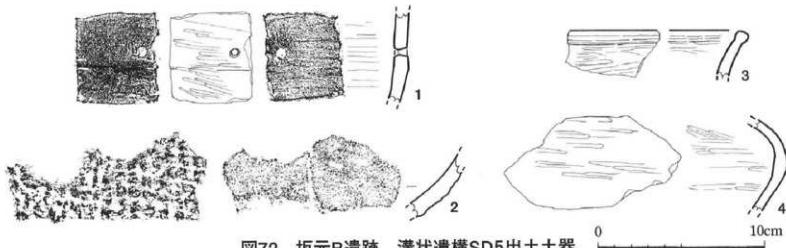
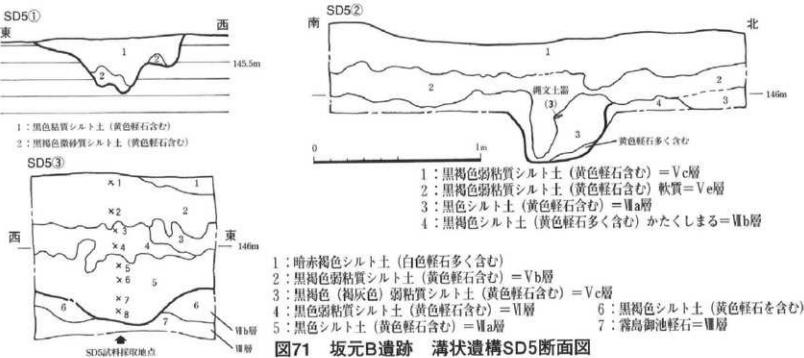
縄文土器は、西プロックを中心として、一部東プロックからも出土した。出土層はⅦ a層を基本とするが、その後の搅乱等によって、より上位の土層や弥生時代以降の遺構内から検出されたものも少なくない。

5～13は縄文時代後期前葉～中葉にかけての土器である。

5はいわゆる阿高式系の四線文土器である。口唇部には太めの刻みがあり、器面調整はナデである。にぶい橙色を呈し、比較的硬質である。6は岩崎上層式～指宿式にかけての土器の口縁部であろうか。横位の沈



図70 坂元B遺跡縄文～弥生時代遺構分布図



線文の上部に下方からの刺突文が施される。器面調整は繊維束状の工具による横方向のナデである。黒褐色を呈する。7は外面に斜行沈線文を施している。にぶい橙色を呈する。8~10は深鉢の底部である。底面に木葉痕のある10は5と同一個体の可能性がある。にぶい褐色を呈し、硬質である。9は外面に縦方向の条痕がある。にぶい橙色を呈する。8は底部外端が張り出す形態をなす。後で述べる晩期後半以降の深鉢の底部の可能性もある。にぶい赤褐色を呈する。11~13は西平式土器である。11・12は口縁部で、口唇部の文様帶に繩文と沈線文・刺突文を施している。13の底部は、底面が上げ底氣味となる。いずれも器面調整は比較的丁寧なミガキである。暗赤褐色～にぶい赤褐色を呈する。12の外面にはススが付着する。

14~44は繩文時代後期後葉～晩期初頭にかけての土器である。

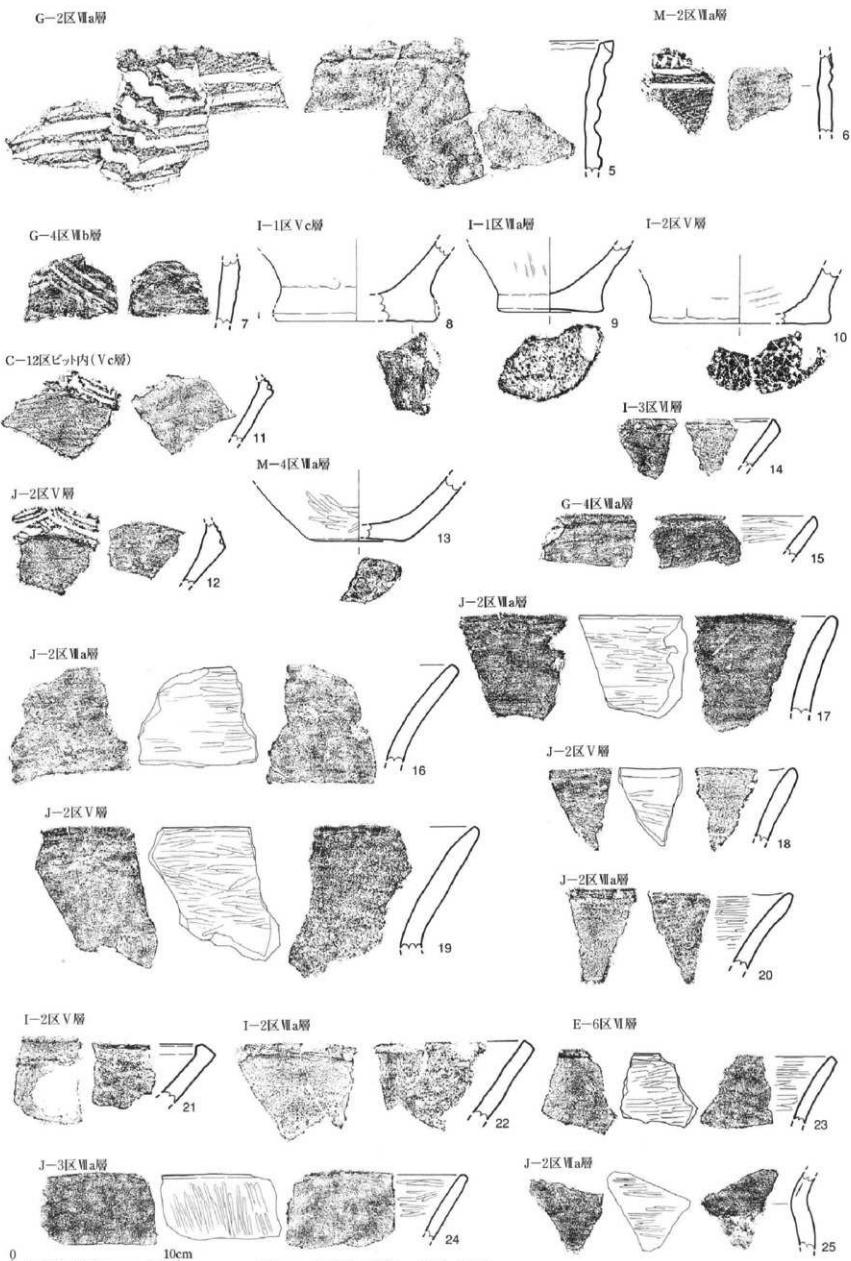


図74 坂元B遺跡 繩文土器

14~25・28~32は口縁部が外反・外傾し頸部でくびれて、胴部が膨らむ器形をなす深鉢と考えられる。口縁部の形態を詳細にみると、口縁先端部が「く」の字状に屈折するもの(21)、口縁先端部が面どりされ三角形状となるもの(14・15・22)、口縁先端部がフラットになるもの(16~20・23)、口縁先端部が丸みを帯びるもの(24・28~30)、口縁先端部が尖るもの(31・32)の5つの種類がある。これらは、にぶい赤褐色・暗褐色・にぶい褐色を呈し、14は口縁部内面に沈線状の痕跡があり、器面調整のミガキも丁寧で硬質である。にぶい赤褐色を呈する。15も同じような特徴をもつ。16~20は胎土・器面調整が極めて類似しており、中にには同一個体と考えられるものもある。器面調整は横方向のミガキが観察され、軽石粒や赤色粒子を含んでいる。にぶい褐色を呈する。16・18の外面にはスヌが付着する。25は頸部と胴部のつなぎの部分である。内面の屈曲部以下はケズリ状の調整である。灰黄褐色を呈する。24は暗赤褐色を呈し、器面調整のミガキは丁寧で、比較的硬質である。27は他と比べてかなり硬質な土器で、口縁部外側と内面の上半部は赤色顔料が塗布されている。31は口縁部内面が黒色研磨されているが、外面にはにぶい橙色を呈する。22の器面調整はナデのみであり、他と異なる。胎土も軟質であり、褐灰色を呈する。外面にスヌが付着している。

26は、直口の深鉢である。胎土にキンウンモを含む。

33~37・40~42は中岳II式土器の深鉢であると思われる。33・34は肥厚した口縁部内面に段が認められ、外面の凹線は比較的深く明瞭である。33の外面にはスヌが付着している。このいずれかの胴部と思われるのが、35と36であり、底部は37であろう。底面が凸レンズ状に膨らむ。これらの器外面は比較的あらい縦方向のミガキが認められ、内面にも部分的にミガキが施されている。胎土には、軽石粒や赤色粒子の他、キンウンモを含む。にぶい褐色を呈する。40・41・42も中岳II式の深鉢と思われる。40は口縁部内面に段があるが、33・34に比べると、口縁部外側の沈線文は細い。にぶい赤褐色を呈する。41の口縁部の凹線は浅い。にぶい赤褐色を呈する。40と42は口縁部に凹点文が加飾される。42は摩滅が著しいが、波状口縁の頂部の可能性がある。にぶい赤褐色を呈する。これらの胎土には透明・黒色・白色の各種鉱物が含まれる。

39と44は浅鉢の可能性がある。39は御領式と思われる。波状口縁となり、口縁部には丁寧な沈線文が施されている。器面は内外ともに丁寧なミガキが施される。44は上加世田式である。口縁部に1条の沈線文がめぐる。器面調整はミガキである。にぶい橙色を呈する。

43は口縁部が弱く肥厚し、外面には稜線が入る。内外面ともにミガキ調整され、にぶい赤褐色を呈する。

45~62は縄文時代晩期中葉~末にかけての土器である。

45・50・53~56は深鉢であり、57・62はそれらの底部ではないかと思われる。45は波状口縁と想定され、器面調整は条痕が認められる。にぶい黄橙色を呈する。50・53~56はいわゆる刻目突帶文上器である。50は口縁部に幅広の粘土帯を貼り付けることによって、断面三角形状に肥厚させるが刻み目はない。胴部にも貼り付けによる突帶文があり、細めの刻みが施されている。器面は内外面ともに工具によって調整されている。にぶい橙色~にぶい黄橙色を呈するが、外面がスヌの付着によって黒くなる。53は口縁部外側に直接、浅い刻みが施されている。橙色を呈する。54は、口縁部のやや下がった位置に断面三角形の突帶文があり、細めの刻み目をもつ。灰褐色を呈する。55と56は同一個体と思われる。口縁部と胴部には断面三角形の突帶文があり、細めの刻み目が施されている。内面にはケズリ状の調整痕がみられる。灰褐色を呈する。

51・58~61は組織痕のある鉢である。いずれも胎土には赤色粒子を含み、にぶい橙色~橙色を呈する。51・58~60はアンギン圧痕で、61は網目圧痕である。51は口縁部を突帶状に肥厚させ、その部分に指頭による押圧刻みを施す。外面には条痕風の調整が施され、内面はケズリ状の調整痕が見られる。外面にはスヌが付着する。58の内器面調整は丁寧なナデである。

46~49・52は浅鉢である。46・48・49は灰色を呈し、内外面ともにミガキ調整される黒川式の浅鉢で、口縁端部の内・外面に沈線を施し、玉縁状になる。47は口縁端部が外反し、その内面に沈線文が施されている。52は胴部で屈曲し、口縁部は外反する。口縁部外側に赤色顔料が塗布される。

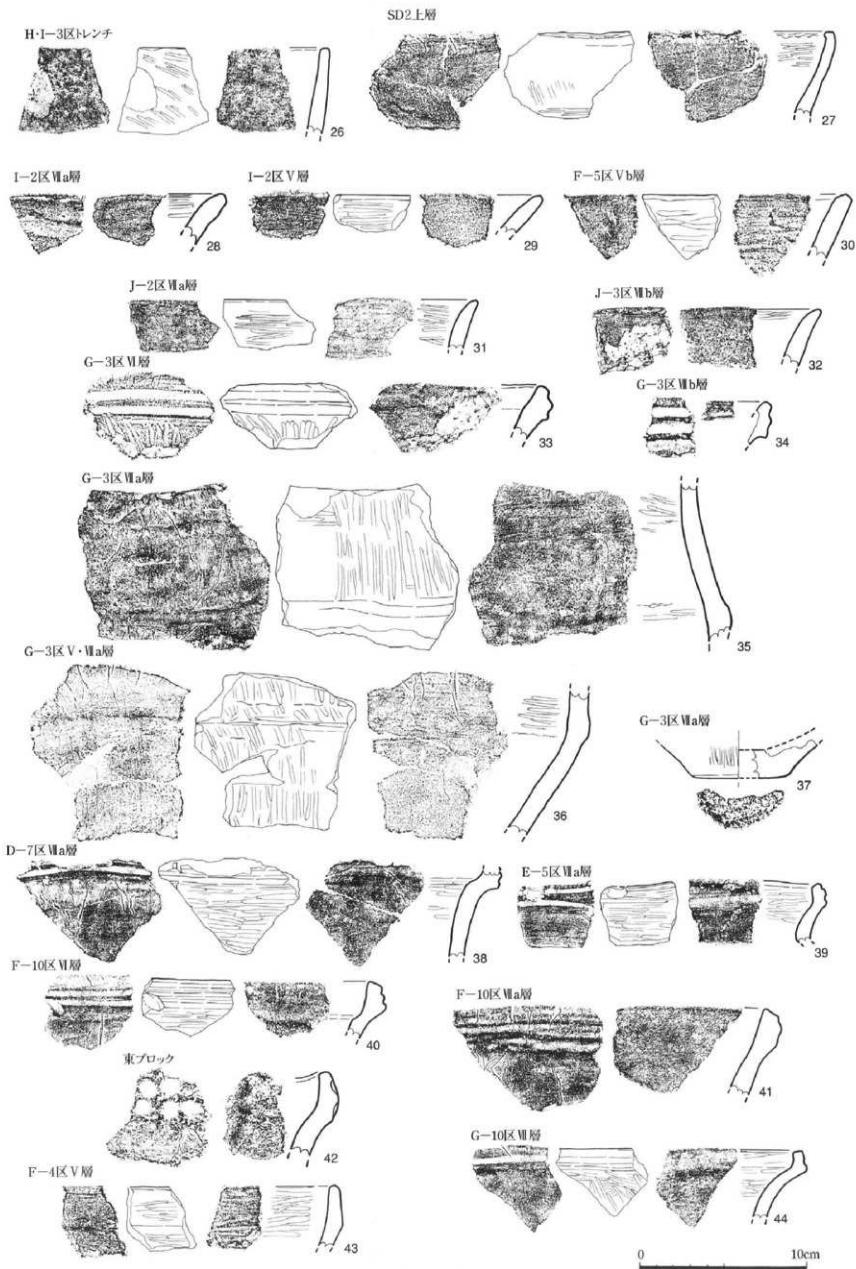


図75 坂元B遺跡 繩文土器

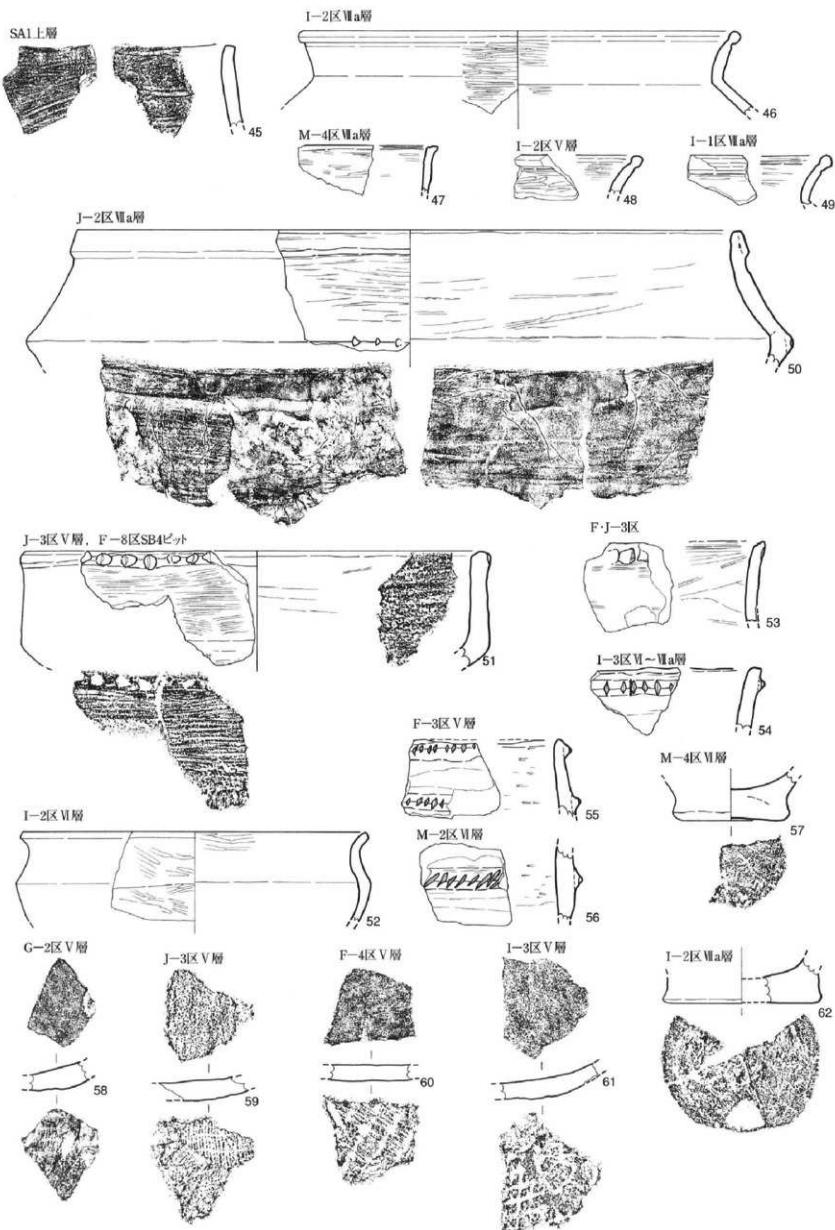


図76 坂元B遺跡 繩文土器

3. 弥生時代の遺構

●竪穴住居跡

竪穴住居跡は弥生時代後期のものが2軒（SA1とSA2）確認された（図68）。

SA1は西ブロックのF-4区のほぼ中心で検出され、西隣の約1.2mの地点（F-3区とF-4区の境界）にはSA2がある。これら2軒の住居が営まれる微地形をみると、後背（南側）の低位段丘面の裾部にあたるやや傾斜のある沖積段丘面がこの付近で緩やかとなって、比較的平坦な面が形成されている。この平坦面は、もともとはもう少し北側へ広がるものと考えられるが、現代の耕地整理によって、SA2の中心部以北、すなわち、北東—南西方向のラインに沿って削られ、そこにはコンクリートブロックが積まれており、今回の調査区域の水田とそのすぐ北側にある水田とは約2mの段差が生じている。

SA1（図77）

SA1はいわゆる花弁状住居跡である。平面プランは北側の一部が方形状を呈するが、その他の部分は円

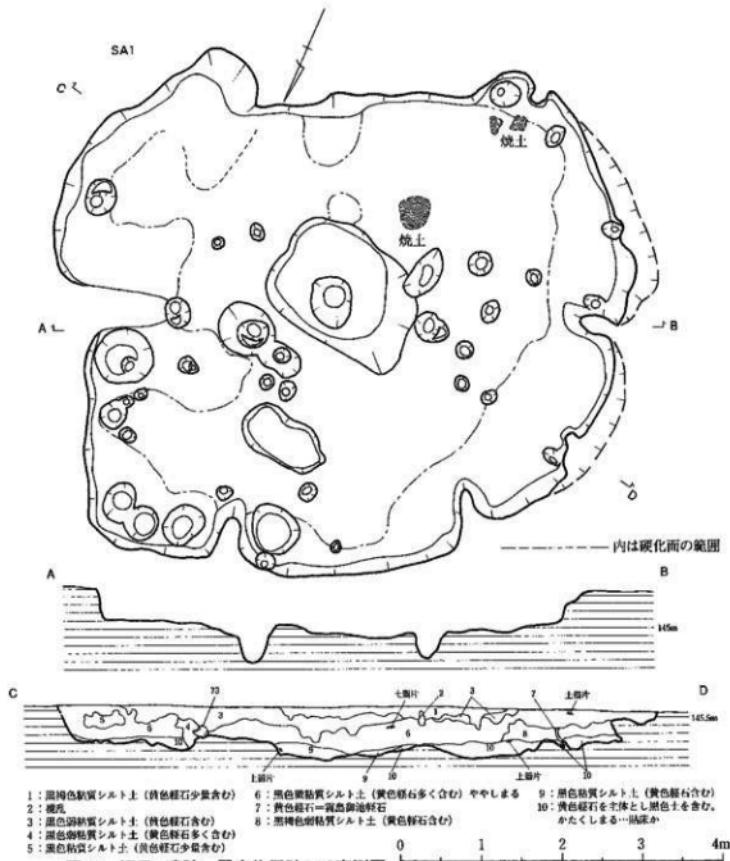


図77 坂元B遺跡 竪穴住居跡SA1実測図

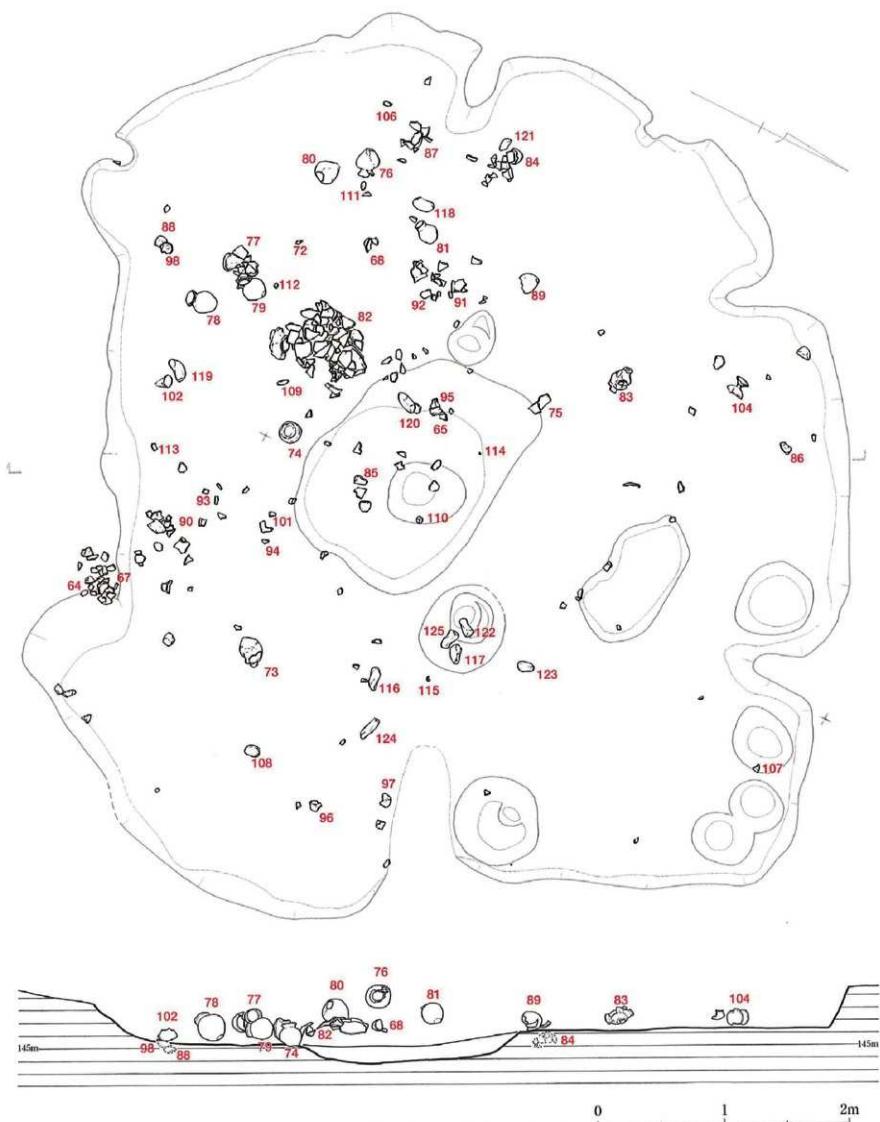


図78 坂元B遺跡 穫穴住居跡SA1遺物出土状況

形を基調としているようにも見えるため、全体的には不整形と言わざるを得ない形態である。長軸約7.7m、短軸約5.9mで、検出面からの深さは約60cmである。いわゆる間仕切りの土壁が6ヶ所に確認され、これらの突出壁によって、住居の壁に沿って5つの空間が作り出されている。また、北西隅の間仕切り空間の壁面において、一つだけ中途半端な位置にわずかな突出部分があるが、意図的なものかどうかは判然としない。図77の下に示したように、住居内堆積土は、貼床層と考えられるかたくしまる最下層（10層）と後代の植物や

小動物によると考えられる搅乱層（2層）を除くと、8つの層に分層可能である。いずれも黒色系土を基調としているが、明るさと質感、そして、霧島御池軽石とみられる軽石粒の含み具合などによって細分した。このうち、4・5・7層は一部において土塊（ブロック）状に堆積する土層であり、9層は中央土坑内の堆積土である。したがって、それ以外の層をまとめると、住居内堆積土の上部にあり、層下部のラインが弧状（レンズ状）となる上層（1・3層）とその下位に堆積する下層（6・8層）に大別できる。上層はその状態から、住居跡の窪地に自然堆積した土層の可能性があるが、下層の6・8層は、中に4・5・7層の土塊を含んでいることや混入した黄色軽石には比較的粒のあらいものがまんべんなく含まれることなどを考慮すると、人為的な埋め土の可能性が高い。なお、8層は住居跡の壁際のみに確認された。この層は住居廃絶の埋め戻しの際に、壁際にもたらされた土ではないかと考えられる。なお、その供給源としては、豊穴掘り込みの周囲にその存在が想定される周堤の土などと思われる。

出土遺物は上層にも散見されたが、大半は6層を中心とする下層から見つかっている。6層の出土土器には、住居跡の南側と西側を中心として、完形となる壺などが多数含まれており、特殊な出土状況を示している。この点については後述するが、6・8層の成因とあいまって興味深い事例を提供している。

住居内施設としては、中央に隅丸方形の浅い土坑（長軸約1.9m、短軸約1.35m、深さ約10cm）とやや北よりも楕円形の深い土坑（長軸約1.1m、短軸約55cm、深さ約10cm）が1基確認された。その他、住居北側の壁に沿って、円形プランの土坑が5基確認された。これらの土坑には大小があり、径約60cmのものが2基、径約30cmのものが3基ある。深さはいずれも20~25cmと同じくらいである。ピットは30基あまりを確認することができたが、棟軸となる棟木を支えるいわゆる主柱穴は中央土坑を挟んで両側にある2基と考えられる。ピットの下部を見ると、両者とも径が30~35cm、床面からの深さは約30cmとほぼ同じ大きさであるが、東側のピットの掘り形は上半部が大きく広がっており、西側のピットも上半部に段が認められることから、住居の廃絶後に柱を抜き取った跡ではないかと考えられる。住居南側の床面とさらにその壁際には、径約35~15cmの灰白色を呈する焼土が合計3ヶ所で確認されたが、これらの検出位置は、住居の炉跡と考えられる中央土坑から離れていることと、これらの焼土付近の直上から完形の土器が多数発見されたことなどから、日常的な炉跡ではなく、完形土器が遭棄される直前に形成されたものであり、特殊な性格を考えた方がいいだろう。住居床面は中央土坑を取り巻くように比較的広い範囲がかたくしまっており、住居跡の断ち割りの際に、貼床と考えられる厚さ15~10cmの硬化層が確認されている。

出土遺物の分布状況は第78図に示したとおりである。先に触れた6層における特殊な出土状況を示した完形及びそれに近い土器群は図84にその分布状況を示した。これをみると、土器は壁際土坑が設置されている住居の北端部以外の区域に配置されている。具体的な状況を述べると、中央土坑から少しづれた南東側の床面に大形の複合口縁壺（82）の口縁部を南に向け横倒しにして置いて、その周囲に中・小形壺12点（複合口縁壺77・78・79・80と単純口縁壺73・74・75・76・81・83、その他口縁部形不明壺84・89）、鉢2点（98・102）、高杯1点（104）、ミニチュア土器1点（107）などを正位や横倒しにして配置している。大形壺は口縁・頸部を胴部からきれいに取り外したような状態で検出され、胴部もその後の土圧で押しつぶされたというよりも、意図的に破碎されて下位に落ち込んだような状態であった。このことは他の土器にも言えることであり、口縁部を取り外して胴部を打ち欠いた壺5点（77・80・73・75・84）、胴部だけを打ち欠いた壺1点（76）、全体を破碎した壺1点（83）、口縁部を打ち欠いた鉢2点（98・102）とミニチュア土器1点（107）、脚部を打ち欠いた高杯1点（104）などがみられ、無傷に近いものは壺4点（74・78・79・81）だけである。それから、中・小形壺に関して特記されることは、12点中の10点（73・74・76・77・78・79・80・81・84・89）に線刻文が施されていることである。この割合は、通常の集落遺跡における線刻文をもつ土器の出土点数から考えると格段に高率であり、この点からもこの住居跡に遭棄された土器群の特殊性を浮き彫りにすることができる。また、住居西側の壁際から出土した土器（76・80・81）は、いずれも床面から28~15cm程度浮

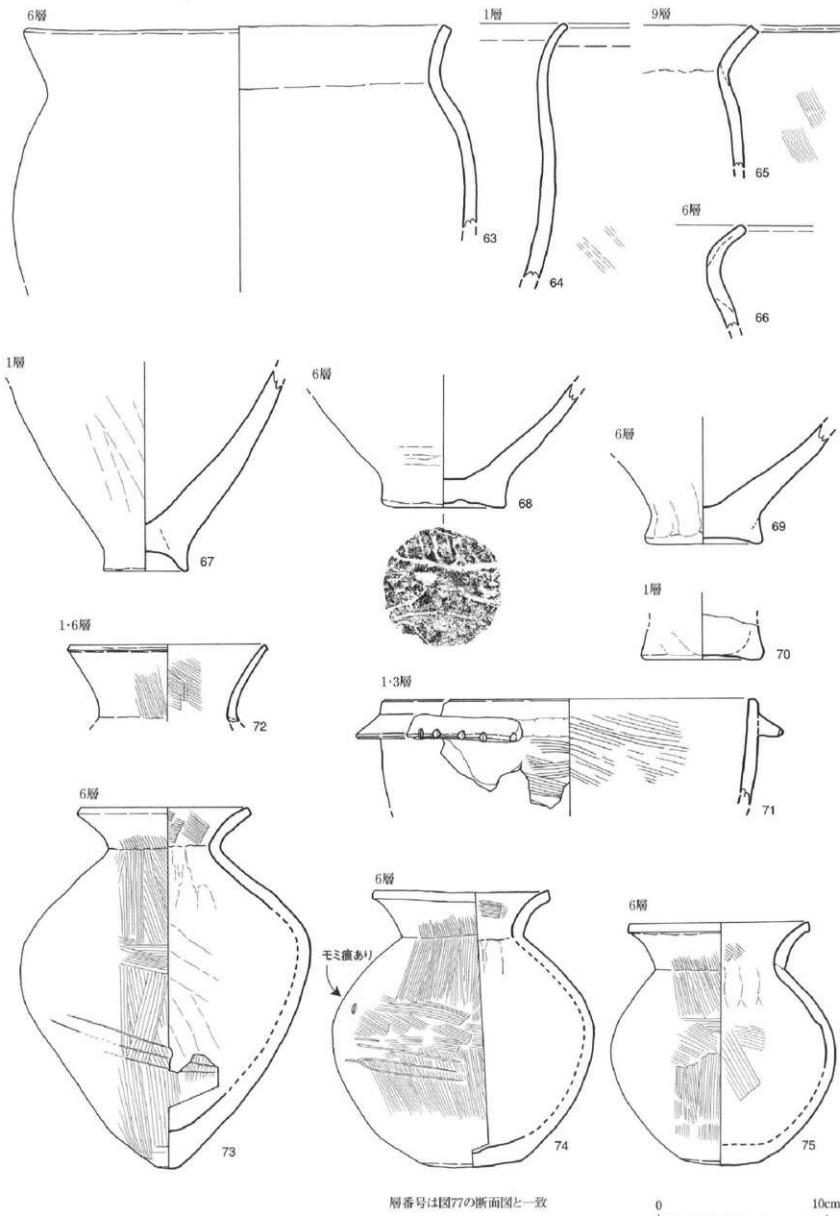
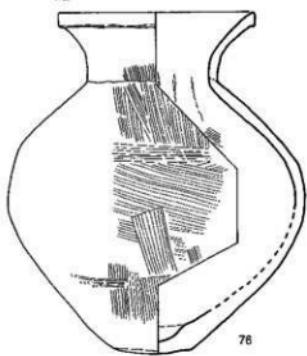
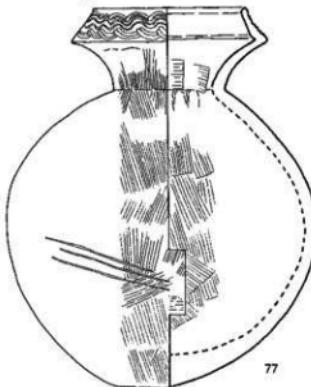


図79 坂元B遺跡 穫穴住居跡SA1出土土器

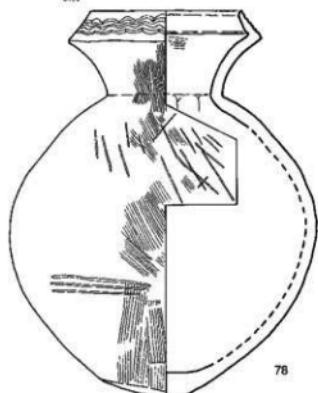
6層



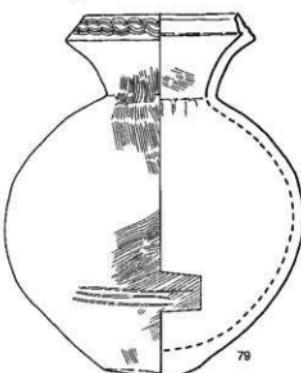
6層



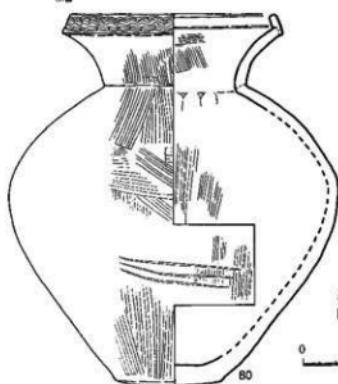
6層



6層



6層



番号は図77の
断面図と一致

0 10cm

6層

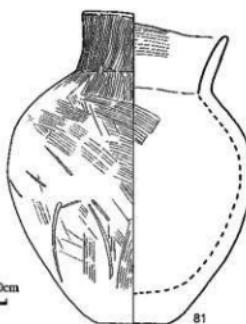


図80 坂元B遺跡 竪穴住居跡SA1出土土器

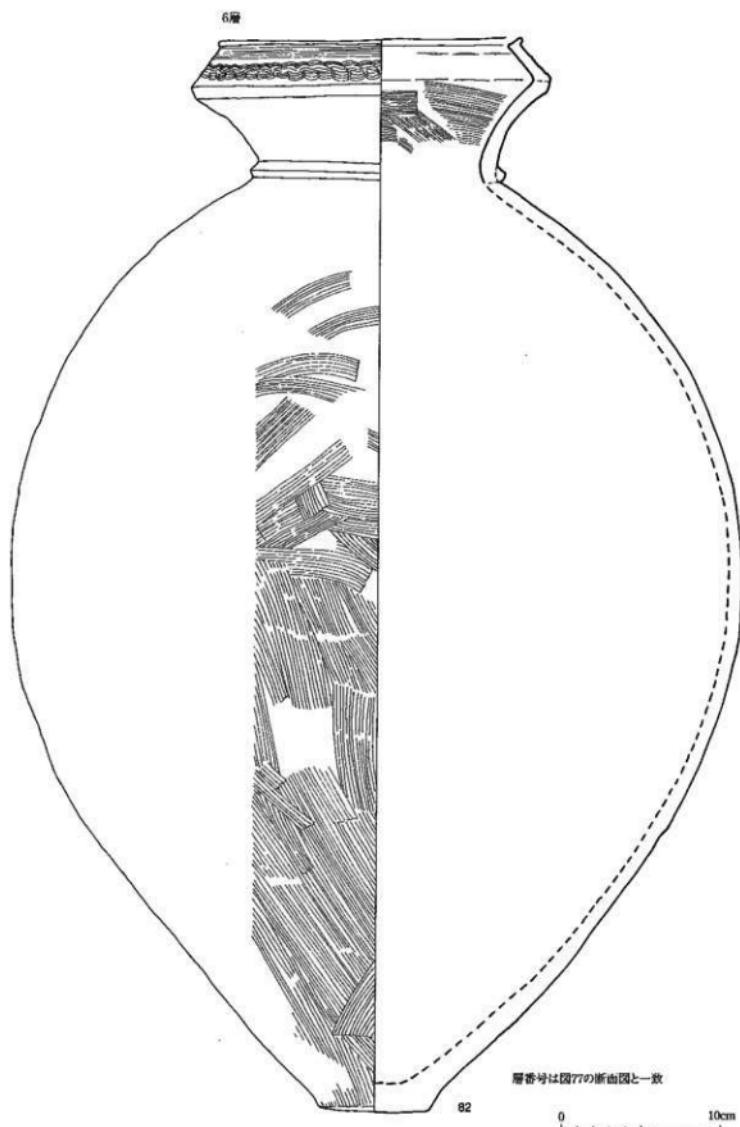


図81 坂元B遺跡 積穴住居跡SA1出土土器

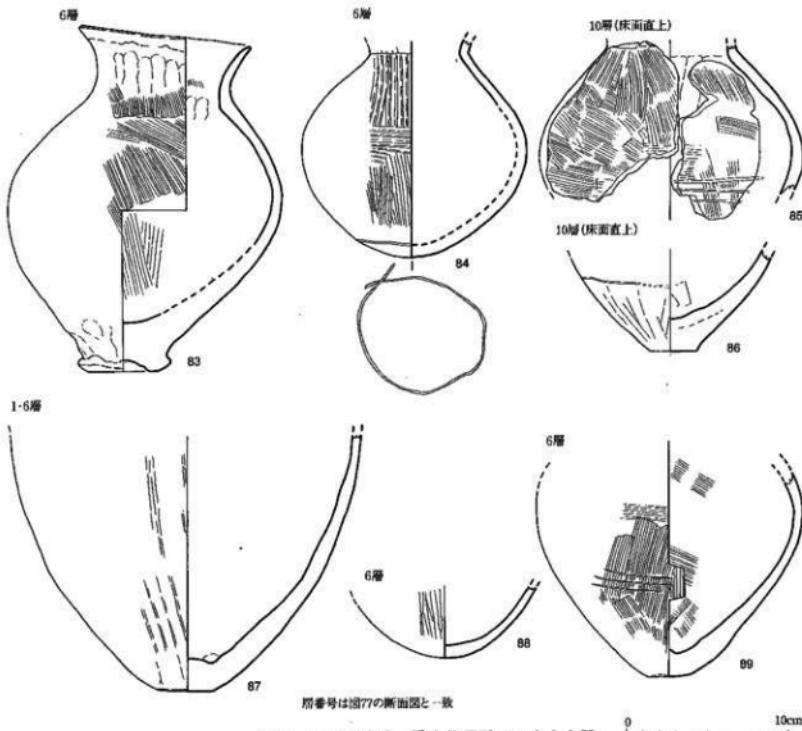


図82 坂元B遺跡 穫穴住居跡SA1出土土器

た状態で出土しているが、これは先に述べた壁際に流し込まれた土層（8層）の上位のレベルにあたる。したがって、これらの土器は、建築材の抜き取りや竪穴壁際の埋め立ての後、住居南側床面において火を焚いてから、遺棄されたものとみられる。その遺棄行為とほぼ同時と推定される竪穴の埋め立てに用いられた覆土が6層であると考えられる。以上は住居の廃絶に伴う儀礼によるものと考えられる。

図79～図83はSA1出土土器の実測図である。おおむね胎土には径2～1mm程度の黒色・灰色・赤色・白色・透明の砂粒を多く含んでおり、色調は、にぶい橙色、にぶい黄橙色、浅黄橙色、灰白色などの比較的明るめである。

63～71は甕である。頸部断面形がS字状になるもの（63・65・66）と、ゆるやかに立ち上がるるもの（64）がある。65は最下層（9層）から出土した。口縁部が強く外反し、口唇部はヨコナデによってくぼむ。器面調整は外面が斜め方向のハケ目であり、内面にも部分的にハケ目がみられる。66は口縁部が強く外反し、口唇部は面どりされている。63は、口唇部は面どりされている部分と丸みを帯びる部分の両方が混在している。胴部がふくらんで、頸部でくびれるが、口縁部は弱く外反する。器面は比較的丁寧にナデ調整が施されているものの、胴部外面には、その後の乾燥・焼成の際に生じたと思われる細かい縦方向のひび割れが無数に入る。口縁部から胴部上半にはススが付着している。1層出土の64は、頸部は直線的であるが、弱く外反する口縁部にはヨコナデが施される。胴部下半には工具痕が認められる。胴部にはススが付着する。71は鉢の可能性もある。口縁部の下に錫状の突帯文が貼り付けられて、突帯上には刻み目が施されている。器面はハケ目調整である。外面にはわずかにススが付着している。68～70は甕の底部と考えられる。いずれも上げ底状

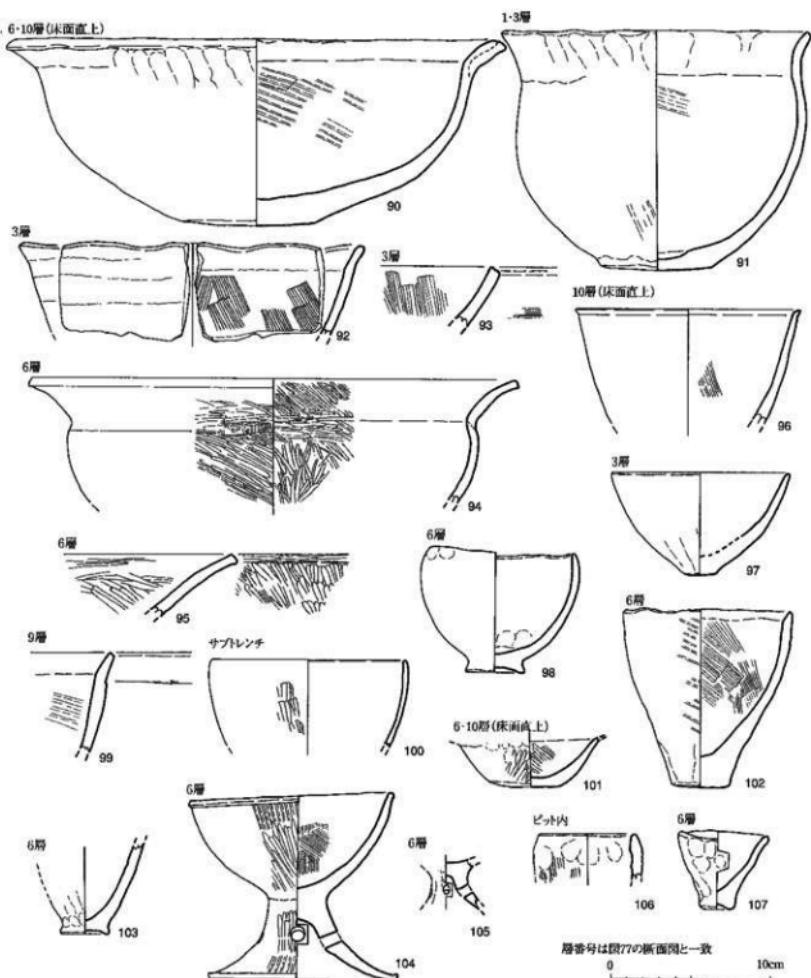


図83 坂元B遺跡 穫穴住居跡SA1出土土器

をなすが、67だけは中空の脚台状となる。68は底面に木葉痕が観察される。被熱のためか、外面が淡赤橙色に、内面が褐灰色に変化している。内器面には炭化物の付着が認められる。底部下半が底すぼまりとなる67とくっしりとした69の内面にも部分的に炭化物が付着する。70は軟質で内面が剥落している。

72~89は壺である。胎土には2~1mmの砂粒が多く含んでいるが、大半は丁寧なハケ目が施されており、甕と比べると比較的平滑に仕上げられ、ミガキが施されるもの（88）もある。色調は、にぶい橙色から浅黄橙色を呈している。口縁部の断面形態によって分類すると、単純に外反するもの（72・73・74・75・76・83）、直線的に立ち上がるものの（81）、複合口縁をなすもの（77・78・79・80・82）とがある。その他、口縁部が失われているために判別できないもの（84・85・86・87・88・89）がある。このうちの89は胎土・色調から

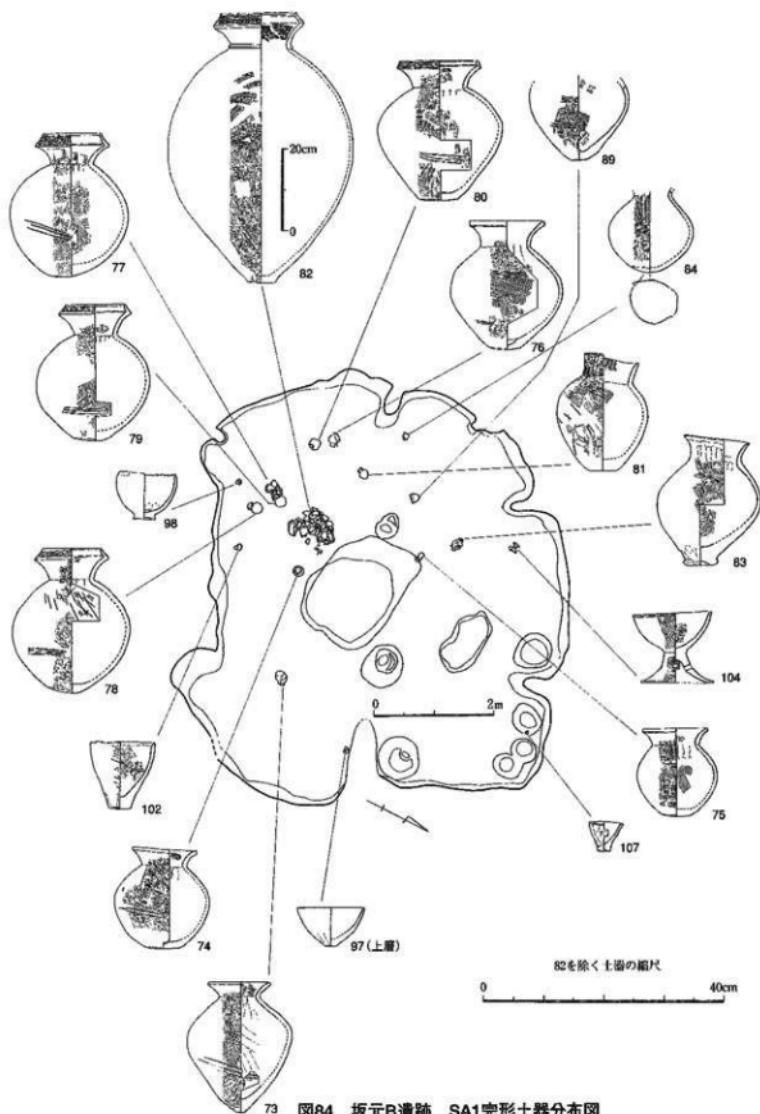


図84 坂元B遺跡 SA1完形土器分布図

72と同一個体の可能性があるが、接合はできなかった。単純に外反する口縁部をもつ壺のうち、75・76は口唇下端がわずかに下方へ突出する。複合口縁をもつ大形壺82は口唇上端が斜め上方に突出し、その直下に平行する櫛描文が施され、その下に櫛描波状文が施される。口縁部の屈折部には幅約1cmの平坦な面どりが施されている。頸部には貼り付けによる三角突帯文が1条めぐる。それ以外の複合口縁壺は櫛描波状文の施文される口縁部文様帶の幅が2cm前後のもの（77～79）と約1cmの狭いもの（80）がある。78と79は形態と文様が酷似している。底部形態に着目すると、安定した平底（81・86）はわずかで、ほとんどは径5～6cmの底面が凸レンズ状に膨らむ（74～79・80・87）。大形壺の82も径約7cmの底面が凸レンズ状に膨らんでいる。73は底部に径約1.5cmの小さな平坦面があるが、全体的に見ると、尖底状をなし不安定である。89も73と同じような形態である。83は壺としては特異な上げ底気味の底部をなしている。全体にひずんでおり、器面調整もやや乱雑である。その他、丸底が2点ある（84・88）、線刻文は、不規則なB1を除くと、いずれも絵画というより記号であり、3本の線刻が平行するもの（73・74・77～80・85・89）と1本の線刻で円を描くもの（84・86）がある。74には3本の線刻の左端上位に意図的とも見受けられるモミ痕がある。78は胴部下半に3本の線刻文があり、胴部上半には縱・斜め方向の十数条の線刻文が認められる。

90～102は鉢である。浅鉢90は外反する口縁部はやや肥厚しており、外面に指オサエ痕が明瞭である。外面にはススが付着している。91は90よりも器高の高い鉢である。やはり口縁部外面には指オサエ痕が明瞭で、胴部外面にはススが付着する。94・95・100には丁寧なミガキが施されている。口縁部が内彫する98には低い脚台が付いている。壺の底部88の上に重なるようにして出土した。99は鉢というよりも小形の甕という形態である。102の内面にはハケ目調整が認められる。

104は椀状の杯部を呈する高杯である。口縁外端部は丸く突出する。脚部には4ヶ所に円形の穿孔がある。

103・105・106・107はいわゆるミニチュア土器である。105は杯部と脚部先端を欠いているが、高杯104をそのまま小さくしたような形態であり、脚部には4ヶ所に円形の穿孔がある。107は手づくね成形が顕著である。底部は上げ底となる。

図85の108～115はS A 1から出土した石器・石製品である。

108と109は6層から出土した。108は磨石である。表面と裏面はよく研磨されているが、実測図の上部と下部には敲打痕も観察される。細粒砂岩製。重さ58g。109も磨石か。全面が比較的なめらかである。実測図左面に側縁部に幅1.5mmの黒っぽい筋状の痕跡が5条ほど認められる。細粒砂岩製。重さ113.8g。113は6層から出土した砥石である。周縁部を打ち欠いており、内外面は研磨によってくぼんでいる。凝灰質頁岩（緑色珪質頁岩）。重さ45.6g。114と115は磨製石鎌である。3層から出土した114は完形品で全長4.3cm、幅2.4cm、厚さ1.3mm。頁岩製で、重さ2.8g。115は床面直上から見つかった。基部を欠損しているが、鎌は明瞭である。頁岩製で現存重量2.9g。112は1層から出土した石包丁である。形態は直線刃外彫背であるが、よく使い込まれているものとみられ、何度も研ぎなおされており、刃部は内彫気味にへこんでいる。整形技法についてみると、剥離の後に表面を敲打し、最終的に研磨によって仕上げている。径約6mmの穿孔が2ヶ所にあり、両側からの回転によってあけられている。高倍率の金属顕微鏡による観察の結果、イネ科植物を対象として使用（穂摘み）したときに生じるバッチ（水滴）状光沢斑を部分的に観察することができた。刃部には光沢斑が認められなかったが、これは研ぎ直しによって、使用痕が失われたからだと考えられる。右手使用の場合、実測図右面が右手親指側の面と考えられる。全長9cm、幅3.1cm、厚さ約4mm、重さ27.5g。110・111は6層から出土した輕石加工品である。110には貫通する穿孔3つ、未貫通の穴が1つある。111の周縁は研磨されている。

その他、S A 1からは、特別な加工痕の認められない自然砾が10点ほど出土している（図86）が、117・122・125は東側主柱穴の掘り形の上部にまとまっていた。石材は122がチャート、123は両輝石安山岩a類の他はすべて砂岩である。これらはすべて重さ1.4～2kgの中に収まる。

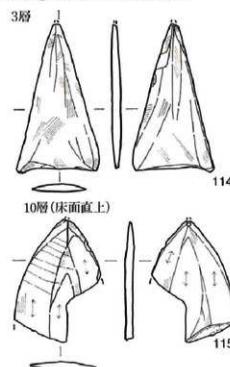
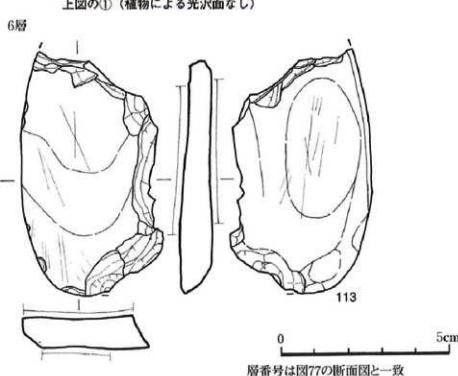
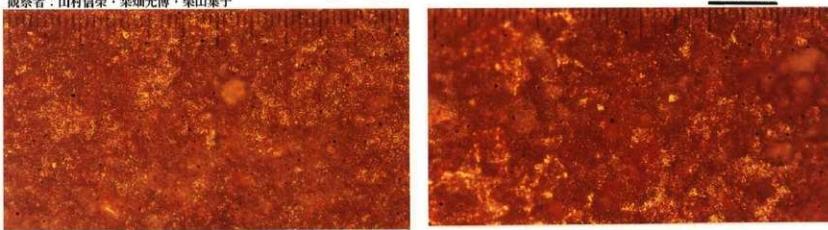
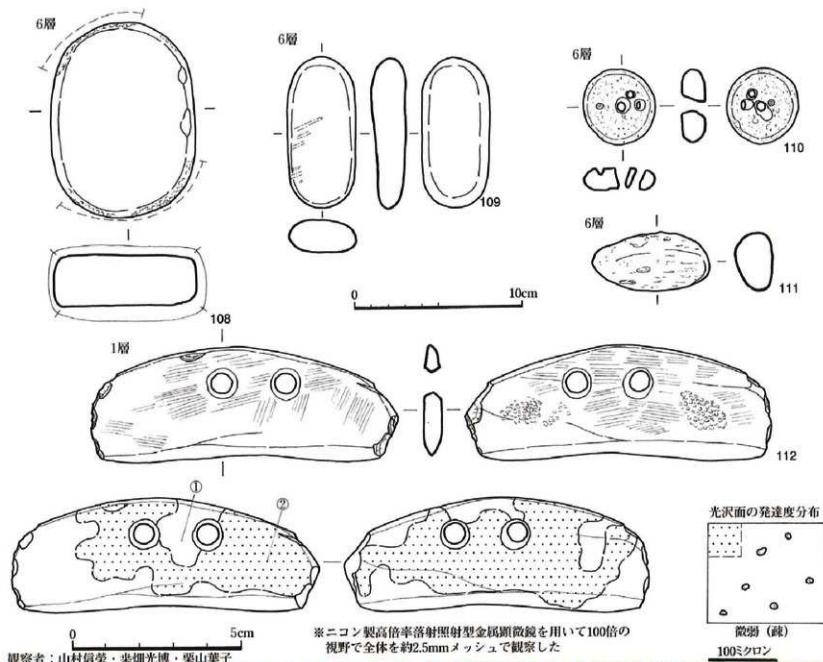


図85 坂元B遺跡 竪穴住居跡SA1出土石器

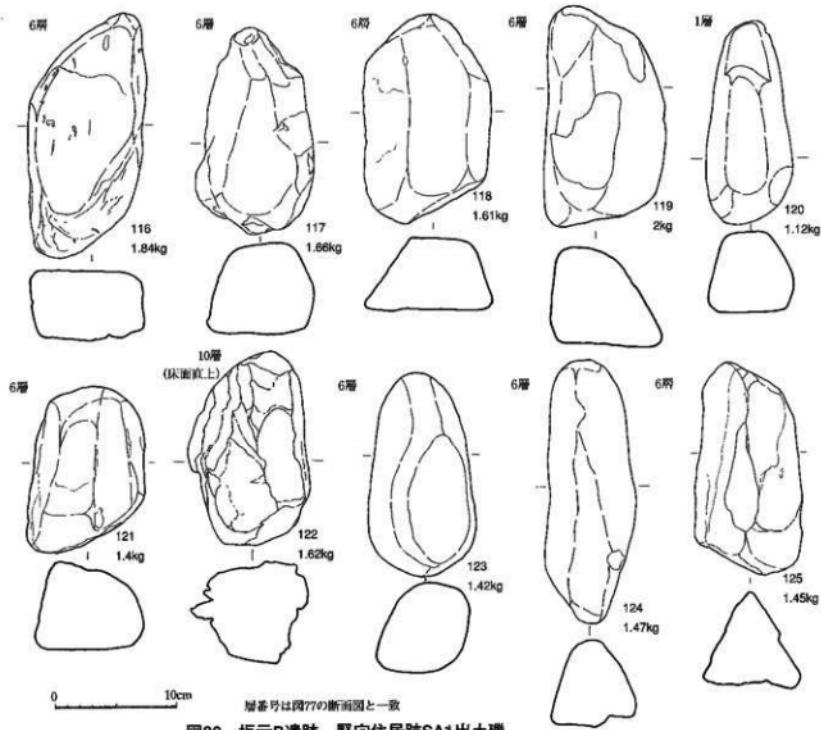


図86 坂元B遺跡 積穴住居跡SA1出土器

S A 2 (図87)

S A 2 は北側部分を削られているために、全容を知ることはできなかった。現状で判断すると、東西軸長約5mの方形プランを基調としており、東辺と西辺に突出した土壁をもつ、いわゆるH形の平面プランを想定することができるが、断定はできない。検出面からの深さは約40cmである。西側の間仕切り土壁の基部は、後世の地層横断によって断裂しており、住居南西隅は平安時代の土坑（S C 10）によって壊されている。

住居内施設としては、突出する土壁が向かい合う空間に不整形の浅い土坑があり、その中央土坑を挟んで、円形の主柱穴が2つある。主柱穴の径は約45cm、深さ60~50cmである。両ピットの土層断面を観察すると、ピット掘り形の片方、あるいは両脇にかたくしまる黒褐色土が認められた。これは柱を埋め立てた際につけられられた柱周囲の埋め土であると考えられる。また、その内側には軟質でルーズな黒褐色土が観察されたが、おそらく柱が腐った痕跡であると思われる。そうなると、この住居においては、廃絶後に柱は抜き取られなかっただ可能性が高い。現状では、東西両側の壁際には土坑が1基ずつある（径約40cm、深さ27~10cm）が、その性格は不明である。さらに、住居南東隅の壁の立ち上がりは階段状を呈し、それぞれの段にはピット（径約15cm、深さ20~10cm）2基ずつがセットとなり、合計4基確認された。これは出入り口遺構と考えられる。その他、小規模な浅いピットが15基確認された。

住居内堆積土は図87の左側を見ると、最上部にある平安時代の包含層であるVc層（1層）、炭化物と焼土層（5・6層）、ピット内堆積土（7・8層）、貼床と考えられる硬化層（11層）を除くと、5つの層が確認できた（2・3・4・9・10層）。このうち、2層は住居内堆積土の最上部にいわゆるレンズ状堆積をしてお

り、堅穴埋没後のくぼ地に流れ込んだ自然堆積層と考えられる。3層以下は基本的に黒色系土層であるが、明度や質感、そして含有物によって細分した。3層は層下部のラインが4層以下の層に食い込んでおり、弥生時代後期から平安時代の時期幅における後世の擾乱と考えられる。黒色弱粘質シルト土である9・10層からは、炭化材がまとまって見つかった。特に中央土坑の10層中の炭化材は床面直上のレベルで検出されおり、住居廃絶後に建築材がなんらかの理由で焼けて堆積したものと推察される。9層上部から出土した炭化材(樹種同定の結果は、環孔材のウルシ属か)を放射性炭素年代測定した結果、 1710 ± 70 年BPという年代値が得られた。

注目されるのは、5・6層と4層である。6層は焼けた霧島御池軽石粒と炭化材からなり、5層はその2次堆積と考えられる。この5・6層と上位の4層との境界付近のレベルからは土器片が多数出土した。SA1と比べると完形になるものは少ないが、これらはいくつかの土器を破碎して投棄したものと考えられる。完形に復元できたのは底面と胴部に線刻文をもつ複合口縁壺(136)だけであるが、これは口縁部を取り外し、胴部以下を破碎して投げ込んだものと考えられる。また、胴部上半を取り去られた状態である壺135は、堅穴外の包含層から見つかった櫛搔波状文をもつ壺の口縁部(288)とは同一個体であると考えられるが、接合はできなかった。4層は黒褐色シルト土であるが、その下部には粗い黄色軽石粒が濃集する部分が認められることから、人為的な堆積物である可能性が高い。

4・5・6層の堆積過程を復元すると、炭化材を含む9層堆積後に、住居跡の中心部で火を焚いて(焼土の形成)、その上に破碎した土器片を投棄し、さらにその上を黒褐色土(4層)で覆ったのではないかと考えられる。これは、すべての土器を破碎する点において、先のSA1で見られた住居廃絶時の行為とは異なっているものの、焼土を伴う点などは共通しており、やはり、住居廃絶後における何らかの儀礼に伴うものであると考えられる。

図89にはSA2から出土した土器の実測図を示した。胎土には2~1mmの透明・白色・黒色・灰色・赤色の砂粒を多く含み、色調は、橙色、浅黄橙色、灰白色などを呈するが、SA1と比べると、橙色系を呈する土器の割合が高いように思われる。

126~133は壺である。口縁部の断面形態を見ると、「く」の字状となるもの(126・128)、「S」字状となるもの(127)、「く」の字状口縁がやや立ち上がるものの(129・130)の3つの種類がある。126~128は胴部が

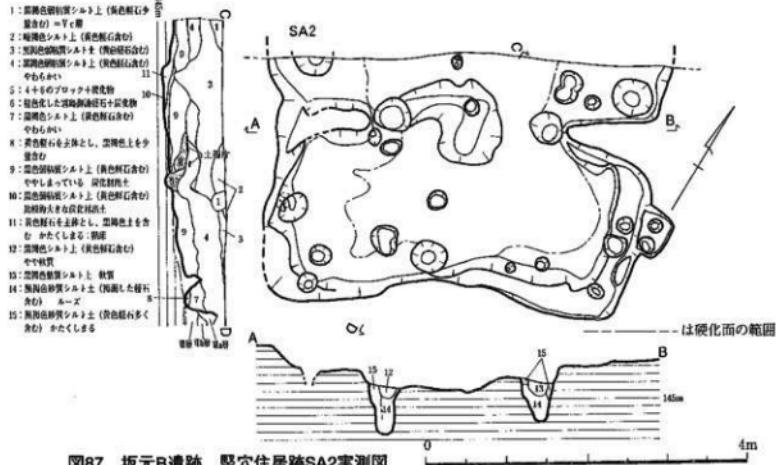


図87 坂元B遺跡 竪穴住居跡SA2実測図

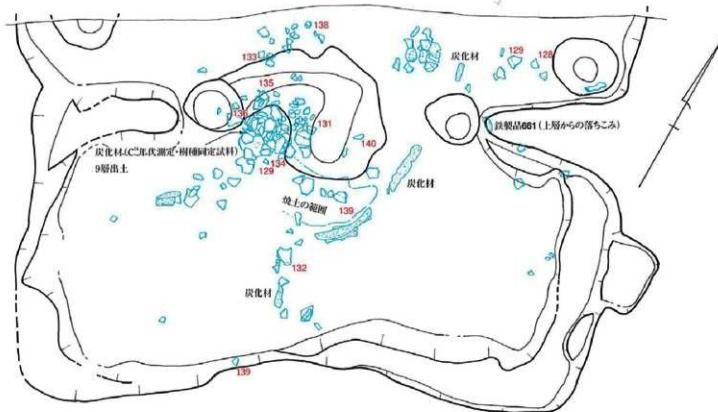


図88 坂元B遺跡 穫穴住居跡SA2遺物出土状況

膨らむ。126の口縁部内面には明瞭な稜線が入る。器面調整はハケメのちナデである。外面にはススが付着する。127は口縁部が強く外反する。128は外面にハケメ調整がみられる。129は口縁部外面に指オサエ痕が認められる。外面にはススの付着が顕著である。130は頸部にハケメ工具による段が形成され、口縁部には縦方向、胴部には斜め方向のハケメ調整が施される。132・133は甕の底部である。橙色を呈する132は底部外端が張り出す平底で、灰白色を呈する133は上げ底となり、内器面が剥落している。132の内面には縦方向のナデによる凹凸ができ、外面にはススが付着する。

131～136は壺である。131は短い口縁部が直立気味に立ち上がる。外面にわずかではあるが、叩き状の工具調整痕が認められる。134は内底面に不明瞭な炭化物が付着するが、壺の底部と思われる。135は、底部から胴部中位までの破片が出土しているが、今回、図示できたのは底部だけである。底面は径約5cmの平坦面が形成される。器内外面ともにハケメ調整が施されており、色調は浅黄橙色を呈する。先に述べたように、接合することはできなかったものの、F-3区の包含層から出土した櫛描波状文をもつ複合口縁壺288と胎土・色調が酷似しているため、同一個体ではないかと思われる。136は櫛描波状文をもつ複合口縁壺である。器面調整はハケメであり、色調は、橙色を呈する。SA1から出土したものよりも口縁部断面形がシャープに欠ける。胴部の最大径は中位にあり、重心が低い。底径は約8cmと大きめで、厚みもある。注目される特徴として、胴部上半に鋸歯状と三角形状の沈線を組み合わせた、蛇を思わせるような絵画的な線刻文があり、底面には「十」字の記号的な線刻文が施されている。これらの文様はSA1で出土した線刻文土器のそれとは異なっている。

137・138は鉢である。浅鉢137は口縁部が外反し、ハケメ調整後に丁寧なミガキが施されている。138は小形の鉢の底部と思われる。

図90にはSA2から出土した石器（139～141）の実測図を提示した。

139は石包丁である。径約3mmの穿孔が1つあるが、ちょうどその部分で折れしており、半分を欠損している。形態は外彎刃直線背をなしていたと考えられる。頁岩製で、現存重量は37gである。全体的によく研磨されており、高倍率の金属顕微鏡による使用痕観察を実施したが、イネ科植物を対象として使用（穂摘み）したときに生じるバッヂ（水滴）状光沢斑は確認できなかった。研ぎ直しによって、使用痕が失われたものと考えられる、また、割れ口（エッジ）には再研磨痕や磨耗痕が認められないので、破損した後は使用されなかつたのではないかと推察される。

140は砥石である。両面を砥面としている。SA1で出土した砥石の石材とよく似た灰色を呈する凝灰質頁

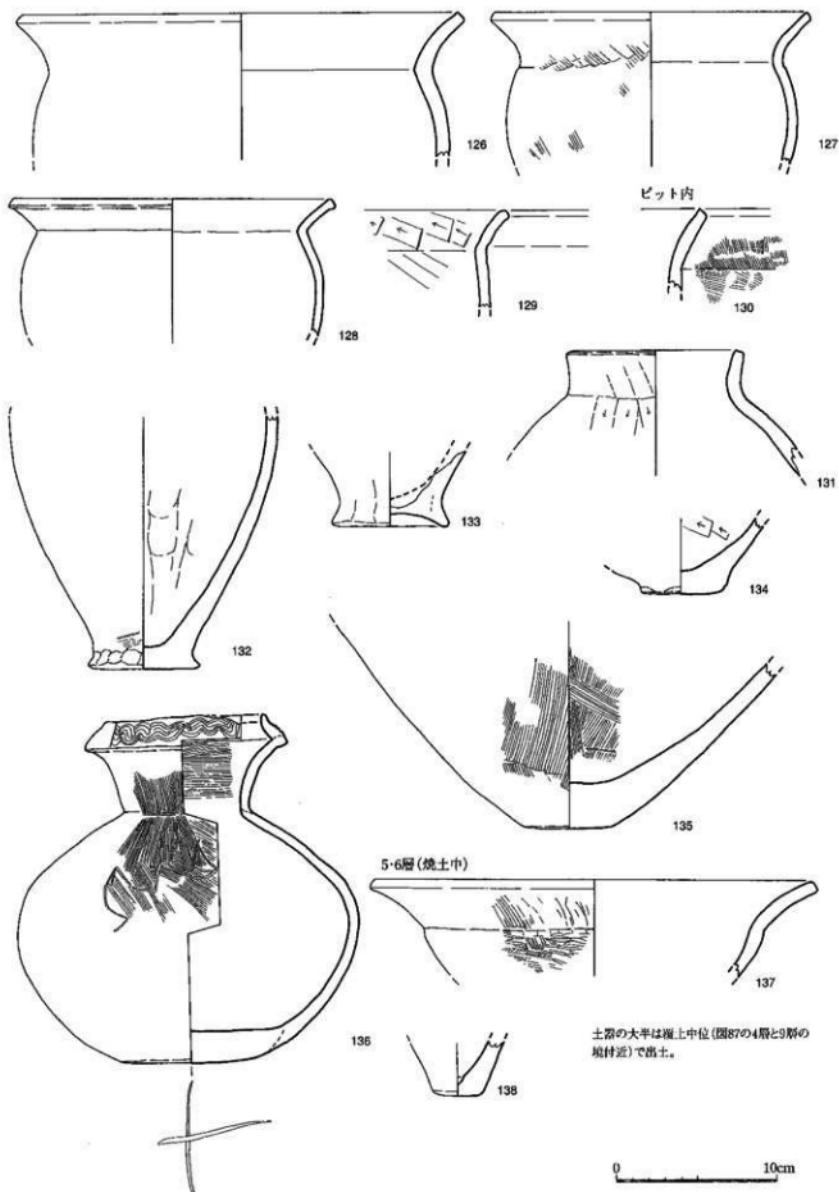
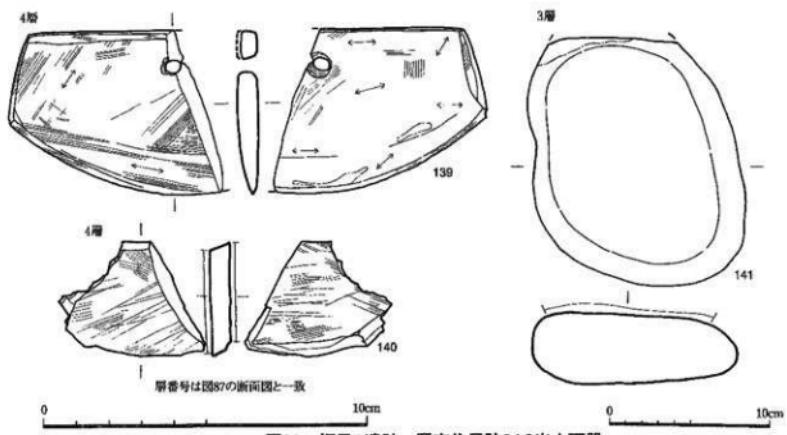


図89 坂元B遺跡 穫穴住居跡SA2出土土器



141は台石と思われる。比較的上層の3層から2つに割れて出土した。表面にはわずかな敲打痕が認められ、実測図下方の周縁部にもわずかな敲打痕をみる。実測図の上端を欠損しており、被熱のため赤色化している。細粒砂岩製。重さ1.49kg。

●土坑（図91）

土坑は3基確認された（SC1・SC7・SC9）が、これらの土坑は、基本土層のVc層より下位で検出され、やはり基本土層のW_a層を掘り込んでいることから、弥生時代のものと考えたが、弥生時代後期以前と考えられるSC1を除くと、出土遺物が少ないと、詳細な時期の認定は困難であった。

SC1は西ブロックで検出された（図68）。平面プランが不整形であり、東西約3.8m、南北約3.4mで、深さ75~55cmである（図91）。底面は凹凸が著しく、平坦ではない。検出面において把握した当初、霧島御池軽石を主体とする埋土が確認されていたが、周辺で確認されたピットの時期と同じように平安時代の遺構ととらえていた。その後の土層断面の観察によって、縄文時代晚期よりも新しく、平安時代よりも古い段階に掘削され埋め戻されたのではないかと判断した。遺構の掘り込みは霧島御池軽石層（稚層）まで達していたが、壁面の上半部は周囲の黒色系土と重なるため、輪郭を把握するのに苦慮した。埋土中位に霧島御池軽石がレンズ状に入り込み、その下位に黒褐色土や黒色土が堆積するが、それの中には霧島御池軽石のブロックが多数含まれていることから、人為的な埋め土であると考えられる。

埋土からは、弥生時代前期・中期・後期といった各時期の土器片が出土した（図92の142~151）。142~144は弥生時代前期の甌であり、145は同時期の鉢と考えられる。146~147は弥生時代中期の甌であり、148~151は弥生時代後期の上器である。151は甌であり、148は臺、149~150は鉢と思われる。148の外側には3本の線刻文が認められる。両輝石安山岩a類製の使用痕のある剥片（152）も出土した。

SC7も西ブロックで検出された（図68）。平面プランは径約2.8mの略円形である（図91）。深さは50~35cmである。底面には凹凸があり、平坦ではない。土層断面を見ると、平安時代の包含層であるVc層堆積時には完全に埋没しており、埋土中位と下部に霧島御池軽石が2次堆積している。下層の黒褐色土から弥生時代前期の土器が出土した（153）。153は口唇部内面に刻み目を施す特徴がある。器面調整・胎土・色調から判断すると、I・J-2区のV層から出土した甌158と同一個体の可能性がある。

SC9も西ブロックで検出された。平面プランは長軸約1.3m、短軸約80cmの楕円形を呈し、深さは約15cmである。東側壁際の底面に浅いピットがある。W層（黄色軽石粒混じりの黒色土）を埋土とする。出土遺物

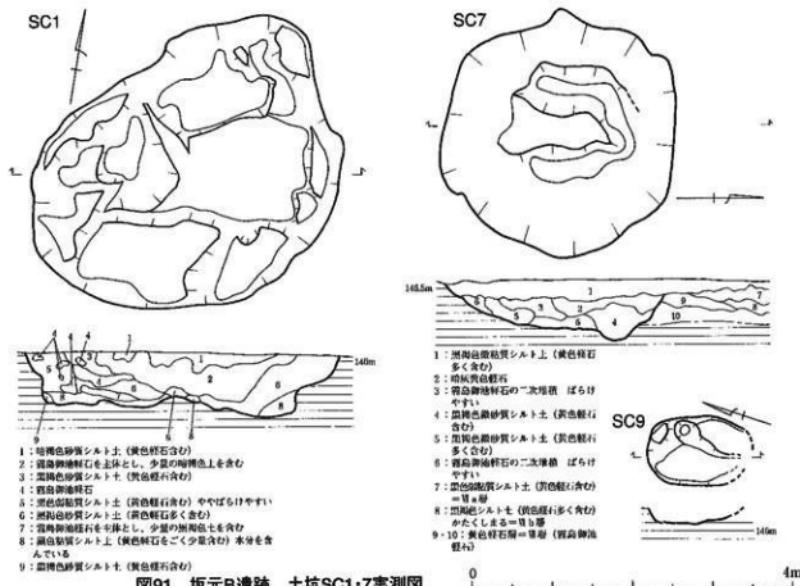


図91 坂元B遺跡 土坑SC1・7実測図

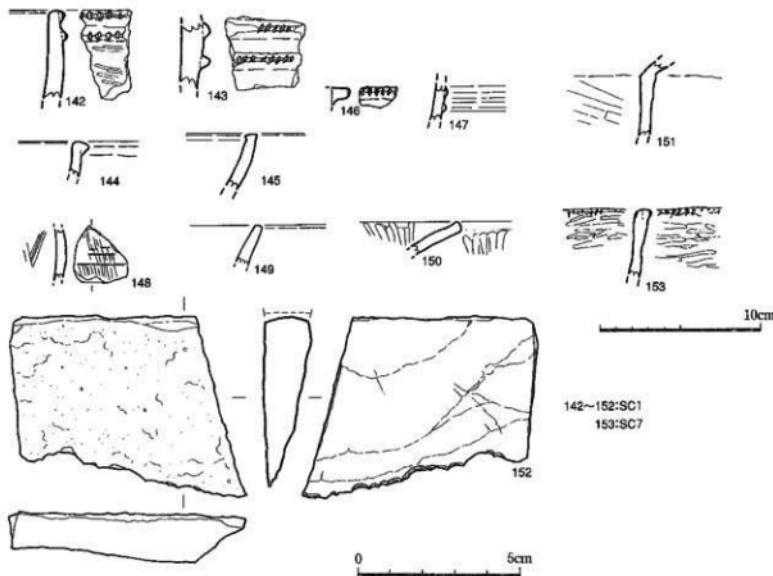
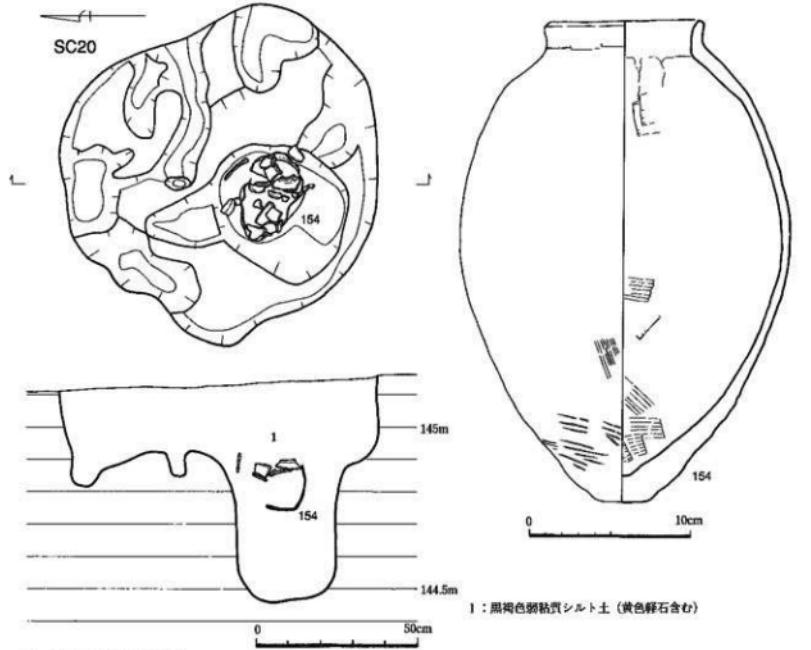


図92 坂元B遺跡 土坑SC1・7出土遺物



G-2区土器埋納遺構

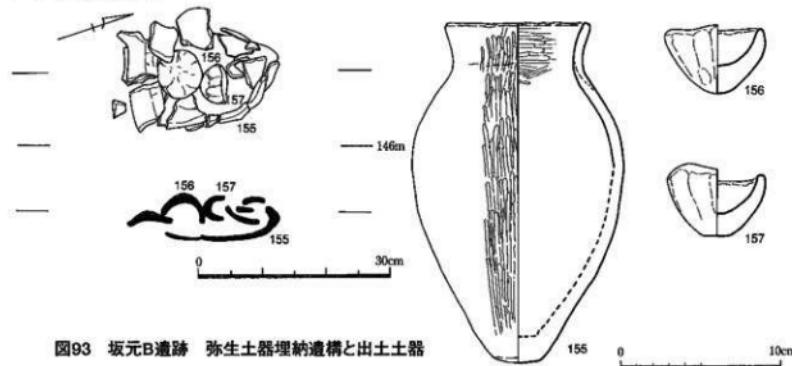


図93 坂元B遺跡 弥生土器埋納遺構と出土土器

はなかった。

●土器埋納遺構 (図93)

S C20は東ブロックのE-6区で検出された(図69・図93)。土坑として把握しているが、内部から完形に復元できる壺が出土したことから、ここで取り扱う。S C20は径約97cmの略円形プランを呈しているが、底面は凹凸が著しく、内部において小ピットが枝状に分かれしていくことから、当初は樹木根などの痕跡の可能性を考えていた。しかしながら、土坑の南西部において一段深くなる径約30cm、深さ約40cmのピット状の落ち込みが確認され、その中位から口縁部を上に向かた状態の壺1個体分(154)が出土したため、土器の埋納

造構と判断した。壺154は胴部中位で破断しているが、図上で接合・復元した。短い口縁部は直線的に立ち上がり、底部は一見丸底のようであるが、径約3cmの不安定な平底を形成する。器面調整は内面下半の一部にハケメが認められるが、大半はナデである。底部外面に叩き状の工具痕が認められる。あらい砂粒を多く含むためか、胴部上半の表面には微細なひび割れが観察される。浅黄橙色を呈する。この壺は、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期に位置付けられる。

G-2区土器埋納造構(図68・図93)は包含層(V層)の掘り下げ中に検出されたため、掘り込み等は確認できなかった。壺155が口縁部を南側に向けて横倒しとなり、内部に小杯状の手づくね土器2点(156・157)が納められていた。壺は胴部を破碎された可能性がある。155は頸部がゆるくしまり、底部は一見尖底状をなすが、径約2cmのレンズ状の底面が形成される。器面調整は外面が縦方向のミガキで口縁部内面にも横方向のミガキが認められる。胴部中位に黒斑があり、色調はやや黄味を帯びる灰白色を呈する。156と157は同じ作り・規格の手づくね土器である。胎土・色調ともに155と類似する。これらの土器は、SC20出土土器と同じく、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期に位置付けられる。

4. 包含層出土の弥生土器

弥生時代前期の土器(図94・図95)

図94と図95には包含層(V層・VI層・VII層)から出土した弥生時代前期の土器を示した。

158~191は甕である。破片が多いため、全形を復元することが難しく、総合的な分類ができないが、口縁部だけに着目すると、口縁部に突帯文をもつもの(158・159・161・163・166・167・170・172・174~177・180~182)、口縁外端部をつまみ出すもの(162・164)、口縁部を外反させるいわゆる如意状口縁(165)があり、口縁部に突帯文をもつものはさらに、その条数が1条のもの(158・159・161・163・175~177)と2条のもの(166・167・170・172・174・180~182)とに分類できる。胴部には突帯文をもつもの(158~160・168・169・171~173・178・179・183・185・186)ともたないもの(163~165)があり、突帯文の条数には1条(158~160・183)と2条(168・169・171・173・178・179)がある。なお、口縁部と胴部の突帯文は刻み目の有無で分類できるが、その割合としては刻み目をもつものが多いようである。器面調整は大半がミガキやナデであり、少数にハケメがみられるものもあるが、その場合、他と胎土が異なるようである。胎土には透明・白色の鉱物を含み、色調は概して暗めの橙~褐色系である。158は、胴部で屈曲せずに、ストレートな形態をなしている。口縁部と胴部の突帯文には鋭い工具によって細めの刻み目が施されている。また、口縁端部内面にも同じ刻み目が認められる。器面調整は横方向のミガキが施され、胎土には透明・白色鉱物を含み、色調は橙色~灰褐色を呈する。内面に刻み目をもつ例は、同時期の鹿児島県本土西部や宮崎平野部においても認められる。159aと159bは接合しないが、同一個体と思われる。口縁部と胴部に刻目突帯文をもち、器面調整には縦方向の浅いハケメがみられる。胎土には比較的大きめの砂粒を含んでおり、色調は浅黄橙色を呈する。口縁部外面にススが付着する。162はつまみ出した口縁外端部に刻みが施され、その下位には刻目突帯文がある。外面には横方向のハケメが観察される。胎土には白色・赤色の砂粒を含み、色調は橙色を呈する。163と165はいずれも胴部が丸みをもち器高が低くなるものと思われるため、鉢とすべきかもしれない。165は、外反する口縁部直下に刻目突帯文をめぐらせ、口縁端部にも刻み目を施している。器面調整は内外面とともにミガキであり、きわめて硬質である。色調は黒褐色を呈する。外面にはススが付着し、内面にも炭化物が付着する。167と168は接合しないが、同一個体と思われる。口縁部と胴部に2条ずつの刻目突帯文をもつ形態を復元できる。器面調整はナデないあらいミガキである。胎土には透明・白色・赤色鉱物を含み、色調は褐灰色を呈する。168の外面にはススが付着する。169は胴部に2条の刻目突帯文をもつ、内外面には最終調整としてのミガキが施されているが、外面にはその前の調整痕とみられるハケメがごく一部にうっすらと観察できる。胎土には透明・白色鉱物を含む。色調は黒褐色を呈し、外面と内面には炭化物が付着する。172は口縁部に2条の刻目突帯文をもち、胴部にも突帯文が付くと思われる。

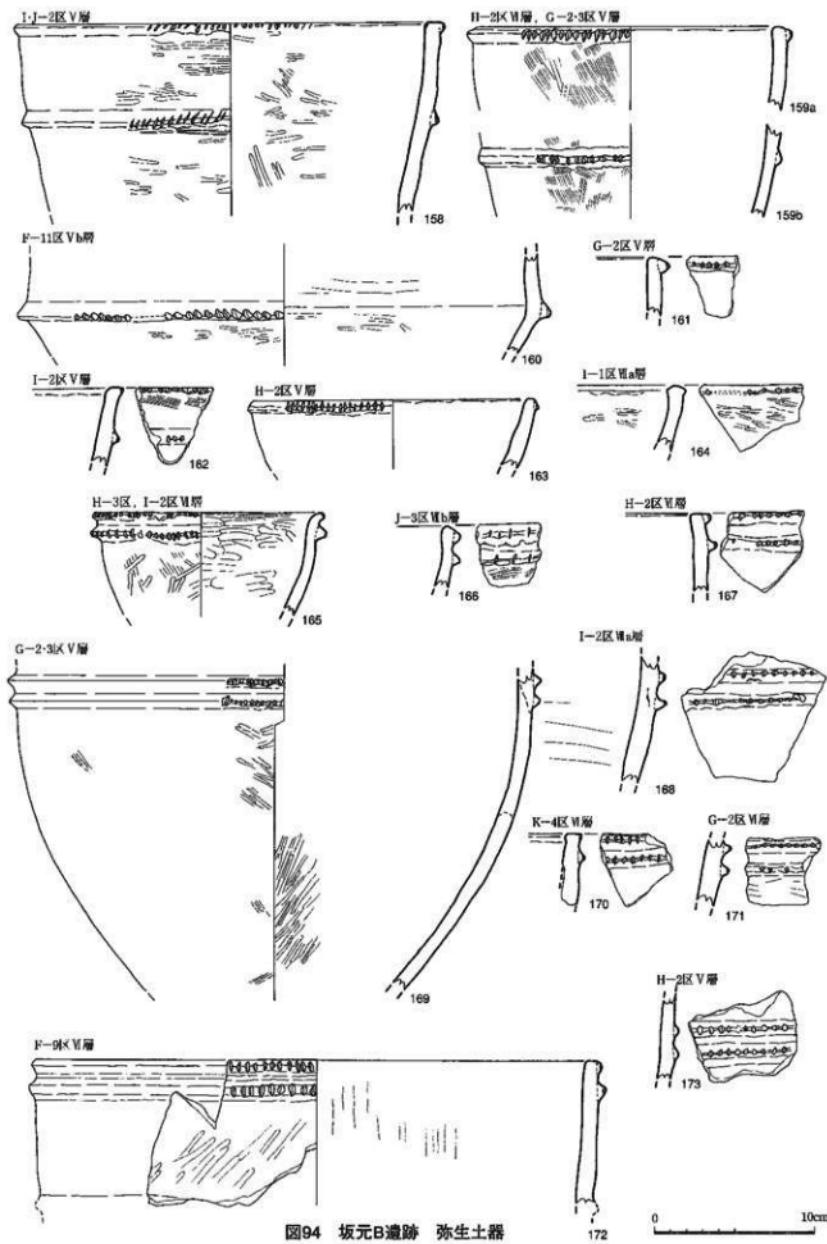


图94 板元B遗跡 弥生土器

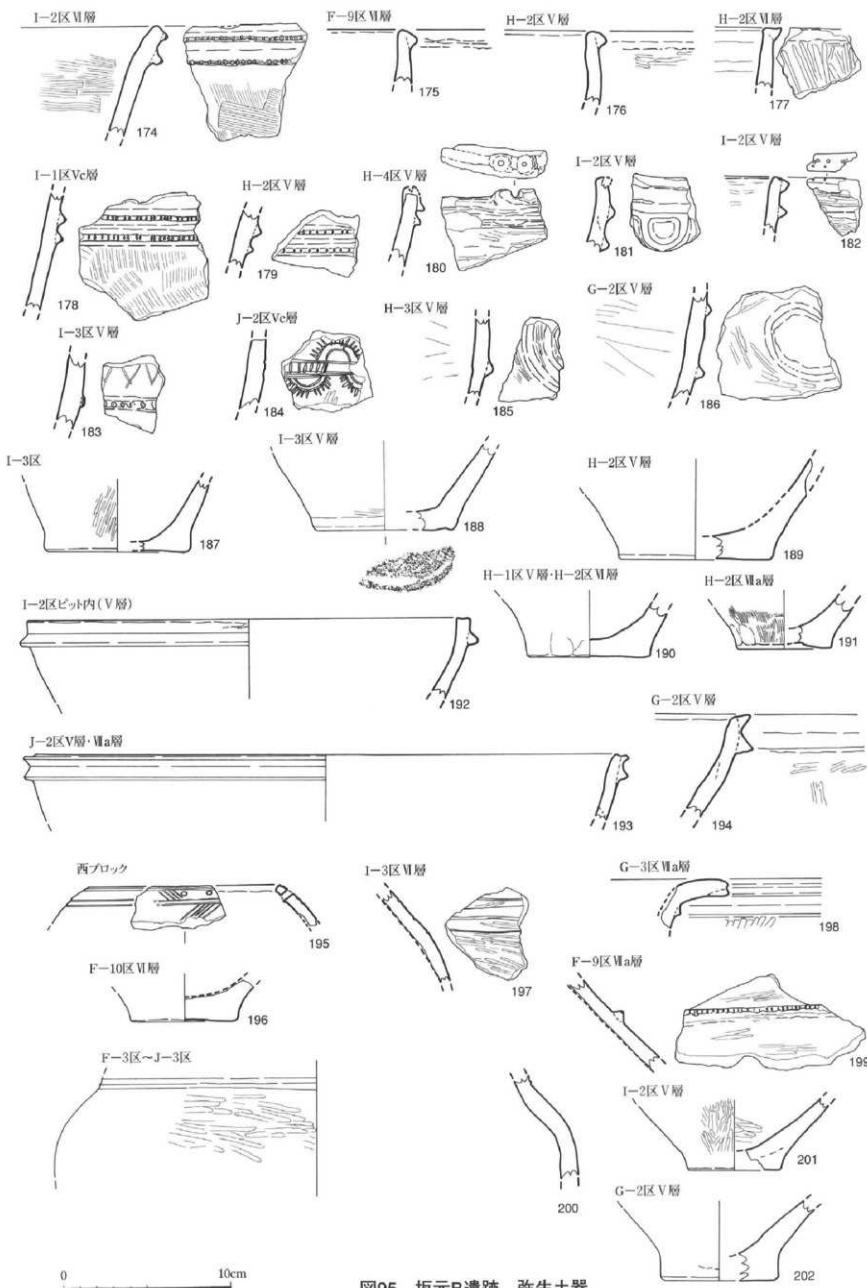


図95 坂元B遺跡 弥生土器

器面調整はナデないあらいミガキであり、胎土には白色軽石粒を含み、色調は褐色～ぶい橙色を呈する。外面にススが付着する。174は178・179と同一個体の可能性がある。174の口縁外端部は貼り付けとつまみ出しによって突出しており、その部分と口縁部下位の突帯文に細かい刻み目を施している。178・179の胴部にも2条の刻目突帯文がめぐる。器面調整は外面とともにハケメであり、胎土は比較的大きめの灰色・赤色砂粒を含んでいる。色調は明るい橙色を呈し、外面にはススが付着する。175・177は口縁部に刻み日のない突帯文がめぐる。176は器面調整が横方向のミガキで、色調は褐色を呈する。175はナデ調整が施され、ぶい黄橙色を呈する。177は外面に縱方向のミガキが施されているが、内面は横方向のあらいナデである。黒褐色を呈する。180・186は突帯文が曲線的となるものや貼り付け文・沈線文・刺突文によって加飾されたものである。180には山縁部に2つの突起が付き、それぞれに上方からの刺突文が加えられている。胎土には軽石粒を含む。色調は灰黄褐色～黒褐色を呈し、外面にススが付着する。182の口縁部上面には刺突文が施される。183は口縁部外面に龜甲状沈線文がある。184は横方向に3本の沈線文をめぐらせ、その間に縦方向の沈線文を加える。さらに上下に2条ずつの弧状沈線を施し、それぞれの外縁に放射状の沈線文を加えるという複雑な文様をもつ。器面調整はミガキである。胎土には灰色・赤色の砂粒を含み、色調はぶい黄橙色を呈する。壺として取り扱ったが、それ以外の器種の可能性もある。187～191は壺の底部と思われる。187は外面の器面調整はミガキであり、色調はぶい黄褐色を呈する。内面に炭化物が付着する。189は胎土に径3mmを越えるあらい砂粒を含む。ぶい黄橙色を呈し、内面に炭化物が付着する。190は器面調整が比較的丁寧なナデであり、胎土に透明・白色鉱物を含む。色調は褐色を呈する。191は外面に縦方向のハケメがみられ、胎土には比較的あらい砂粒を含む。色調はぶい黄橙色を呈する。

192～194は鉢である。193と194は口縁部に2条の突帯文をもつ、192は口唇部をくぼませ、口縁外端部をつまみ出す。ぶい赤褐色を呈する。192と194の突帯下位にはススが付着している。

195～202は壺である。195は、無頸壺の口縁部である。表面の剥落と磨耗が著しいものの、口縁直下に2条の沈線、少し間を開けて2条の沈線が認められ、その間に4～5条がセットになった斜行沈線がみられる。口縁部には焼成前に外側から内側に向けてあけられた径4mmの2つの穿孔があるが、これと同じ穿孔が、口縁部の反対の位置にもう1対あるものと考えられる。胎土には径2～1mmの灰色・赤色の砂粒を多く含み、色調は浅黄橙～灰白色を呈する。197は頸部に段があり、その部分と上下に1本ずつ沈線文が施文される。内面は剥落しており、色調はぶい橙色を呈する。198と199は同一個体と考えられる。外反する口縁部の下位に三角突帯文をもつ。口唇部には凹線状のくぼみがあり、突帯文以下は縦方向のミガキが施される。199は頸部から胴部にかけての部分であり、細めの刻み目をもつ三角突帯文がめぐる。器面調整は丁寧なミガキである。胎土には径2～1mmの灰色・赤色の砂粒を含み、色調はぶい橙色を呈する。200は胎土が上で述べた壺などと類似するもので、器壁も比較的厚く、全形も判然としないが、頸部と胴部の境に2本の沈線文が施され、器面調整は横方向のミガキである。胎土には透明・白色鉱物が目立ち、色調は褐色を呈する。196・201・202は壺の底部と思われるものである。196はいわゆる円盤底である。内面は剥落しているが、底面の器面調整は丁寧である。色調はぶい黄橙色を呈するが、胎土の混和材が一致することから、198・199の底部の可能性がある。201は200と胎土・色調が類似する。

弥生時代中期の土器（図96・図97）

図96と図97には包含層から出土した弥生時代中期の土器を図示した。Ⅵ層からの出土が基本と考えられるが、一部、Ⅴa層から出土するものがある。また、遺物とりあげ時の層序認定の混乱（当初、Ⅵ層はⅤ層の中に組み込まれていた）もあったため、Ⅴ層出土となっているものも少なくない。

203～240・243・245は甕である。口縁部から胴部までつながる資料も多く、比較的全形を推定することが容易であった。最も多くを占めるのは、口縁部に断面形三角形（203～215）や台形状（216～227・233～237）の突帯文が付くものである。前者には刻み目をもつもの（203～209）もある。胴部には断面形三角形

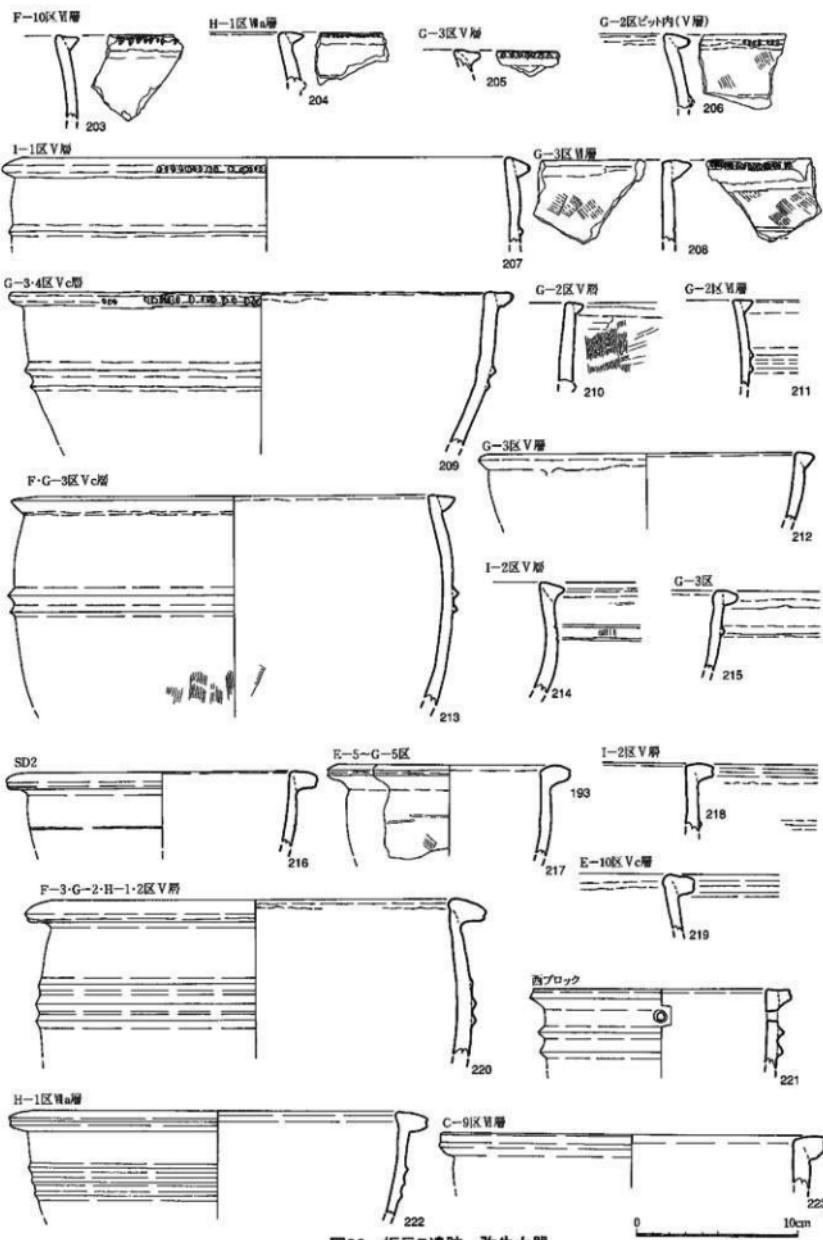


図96 坂元B遺跡 弥生土器

の突帯文をもつもの（206・207・209・211・213・218・220～222・224・227）、沈線文をもつもの（208・214・216・217）、文様を付加しないもの（212・232・234など）がある。胴部に文様をもたないものは鉢の可能性もある。器面調整はナデが主体であり、ハケメをもつものは少ない。胎土はいわゆるキンウンモを含むものが多くあり（206・207・208・209・216～227・233～237）、その場合の上器の色調は、まれに明るめの橙色系のものもあるが、おおむねにぶい褐色や灰褐色などの褐色系である。これらは、おおむね入来Ⅰ・Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式の甕に該当するか、それに併行する土器群である。

それ以外の甕としては、口縁部が「く」の字状に外反するもの（238）、比較的厚手の異質な土器（228～231）の他、いわゆる下城式系甕（240～242）などがある。

203～215は、入来Ⅰ式に該当する。203は口縁部に刻目突帯文をもつ。口縁部突帯は比較的小さめであり、その上面はへこんでいる。器面調整は内面外面ともにミガキに近い丁寧なナデであり、橙色を呈する。外面にはスグが付着する。204は口縁部突帯が比較的シャープであり、刻み目も細かい。胴部にも突帯文があるものと思われる。にぶい褐色を呈し、口唇部に炭化物が付着する。206と207は同一個体の可能性が高い。口縁部突帯が上からかぶさるように貼り付けられ、口縁部内面がへこむ。胴部にも三角突帯がめぐり、外面には浅いハケメが観察される。胎土にはキンウンモを含み、にぶい褐色を呈する。208は口縁部に比較的大きめの三角突帯文をもち、口縁部内面はくぼむ。胴部上半に横位の沈線文が2条以上めぐる。にぶい黄褐色を呈し、外面にスグが付着する。209は口縁部に比較的大きめの突帯文をもち、その突帯文下位は貼り付け後のナデツケが不十分である。胴部には2条の三角突帯がめぐる。器面調整はナデであり、胎土にはキンウンモを含む。にぶい褐色～灰黄褐色を呈し、外面にはスグが付着する。210は口縁部外面に浅いハケメが認められる。213は口縁部に三角突帯をもち、胴部にも2条の三角突帯をめぐらせ、胴部下半には浅いハケメが認められる。胎土には赤色・灰色の大きめの砂粒を含むが、キンウンモはみられない。色調はにぶい橙色を呈する。前期の土器の項目で述べた甕198・199・196に胎土が類似する。外面の胴部突帯文の下位にはスグの付着が顕著である。211・214・215は213と胎土・色調が類似する。211・215は内外面ともに炭化物の付着が著しい。214はやや膨らみ気味の胴部に2条の沈線文がめぐる。外面にはスグの付着が顕著である。

216～227・233・234・235は入来Ⅱ式に該当する。口縁部には台形状の突帯文をもち、その端部を強くヨコナデしてくぼませるために、突帯文の断面形がM字状となる。突帯文の内側、すなわち口縁部内面は突帯貼り付け後の調整によって凹線状にくぼむ。胴部には沈線をめぐらせるものと三角突帯をめぐらせるものとがあるが、前者は少數である。220・222・224・227には胴部に3条の三角突帯がめぐる。器面調整は大半がナデであるが、233にはハケメ調整が認められる。この土器は他と比べて明るい橙色を呈する。ほぼすべての土器の胎土にキンウンモが認められるが、その中でも221・223などは表面にキンウンモが多量に浮き出ることによって器面がキラキラしている。221は比較的小形の甕であるが、口縁部突帯の上面がやや上方へ傾いている点は、より新しい山ノ口Ⅱ式の特徴である。口縁部直下に外面から開けられた補修孔がある。

232・235～237は口縁部突帯が上述した入来Ⅱ式よりも外方にのびることから、山ノ口Ⅰ式に相当すると考えた。236の口縁部突帯は下がり気味であるが、235・237は口縁部突帯の上面がやや上方へ傾いている。

236は口縁部の内側が突出するもので、胎土にキンウンモはみられない。にぶい黄褐色を呈する。

238は口縁部が「く」の字に外反し、口唇部には面どりがある。頸部直下には2条の沈線文がある。

228～231は口縁部の突帯文が玉縁状をなし、胴部には指でつまんだ痕跡を残すミズバレ状突帯文をもつ厚手で重量感のある土器である。胎土には透明や黒色のガラス質の鉱物が多く含まれ、ザラザラした印象を受ける。暗褐色を呈する。当地域では、中期前半の遺跡で少數ずつ見出すことができる甕である。

240～242は先述したようにいわゆる下城式系の甕である。240は口縁部のやや下がった位置に刻目突帯文をめぐらせる。口縁内面は口唇部に向かって外傾し、弱り稜線が認められる。突帯文以下は縦方向のハケメ調整が顕著であり、内面にも横方向のハケメが施される。胎土には白色・灰色・赤色の砂粒を含み、色調は

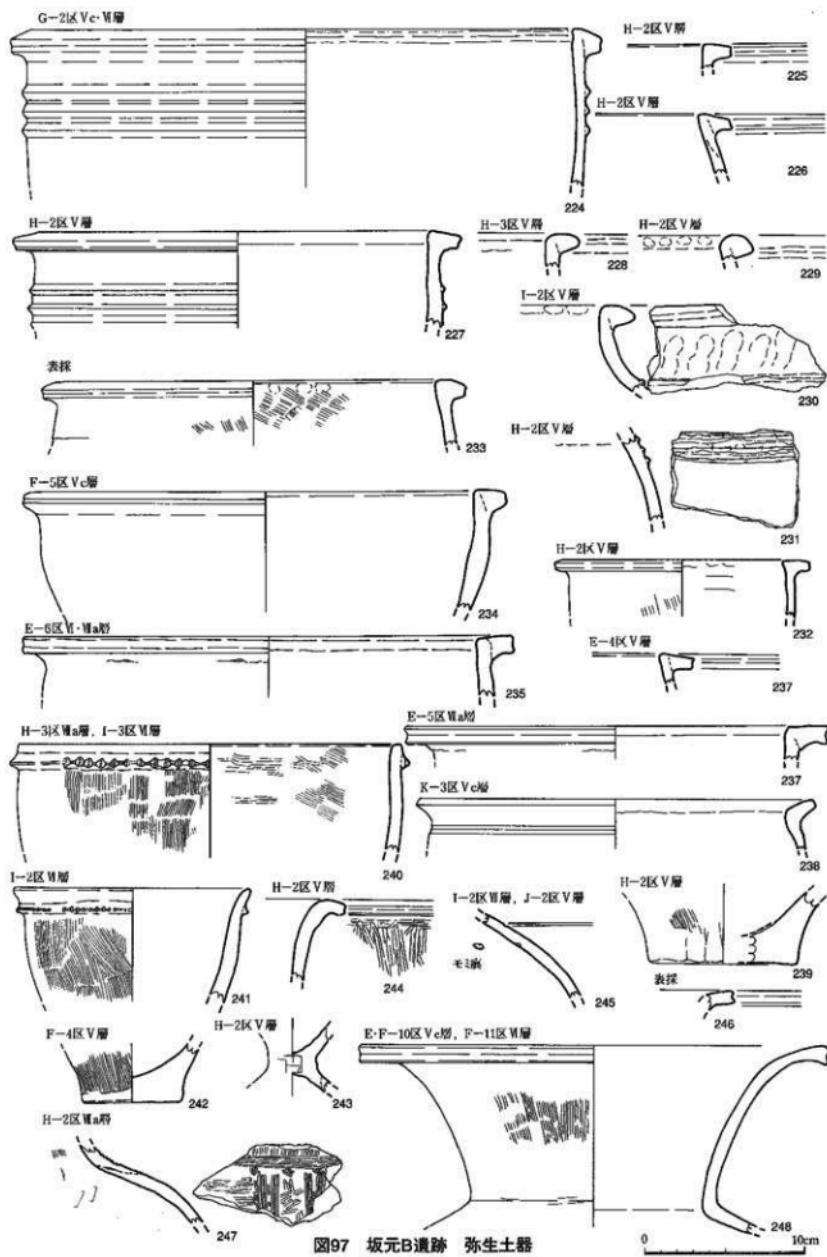


図97 坂元B遺跡 弥生土器

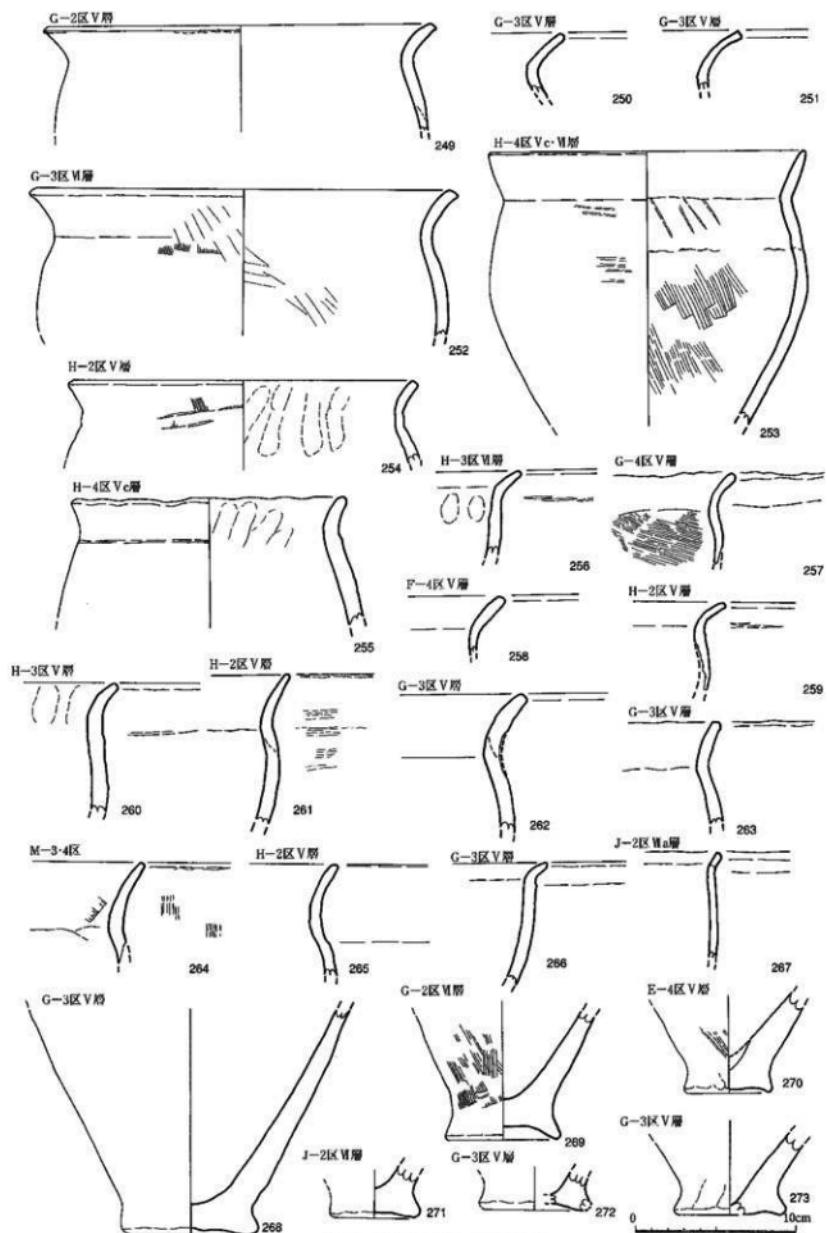


図98 坂元B遺跡 弥生土器

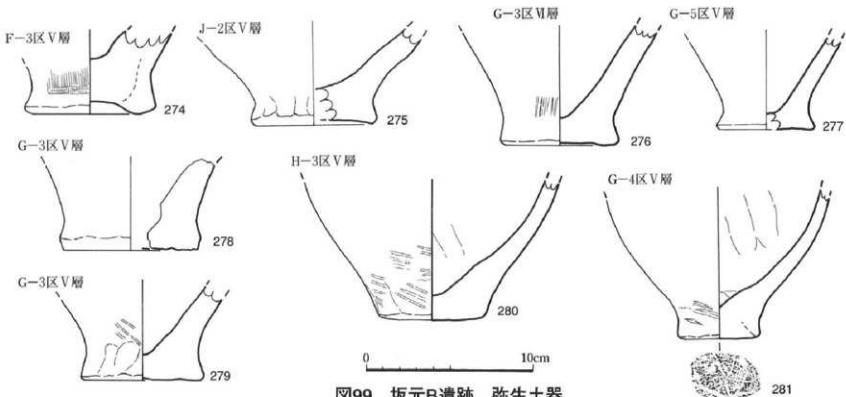


図99 坂元B遺跡 弥生土器

橙色を呈する。241と242は胎土・色調・器面調整が一致するため、同一個体と考えられる。外反する口縁部は先細りとなり、胴部はやや膨らんで、きれいな平底の底部へといたる。口縁部のやや下がった位置に細かい刻み目をもつ突帯文がめぐる。突帯文以下は縦方向のハケメが顯著である。内面の調整はハケメのちナデと考えられる。白色・灰色の砂粒を含む胎土は硬質である。灰黄褐色を呈しており、外面にはススの付着が顯著で、口縁部内面にも炭化物が付着する。

244～248は壺と思われる。244は外反する口縁部がやや垂れ下がる。口唇部には凹線状のくぼみがある。頸部外面は縦方向のミガキが施されている。胎土には比較的大きめの赤い粒子を含み、にぶい橙色を呈する。245は胴部上半に沈線が1条めぐる。内面にモミ痕が認められる。胎土には白色鉱物の他、キンウンモを含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。246は大きく外反する口縁部の口唇部に凹線状のくぼみがある。胎土にはキンウンモを含み、褐色を呈する。247は頸部から胴部にかけての破片であり、きわめて特徴的な文様をもつ。頸部下位に横位の沈線文6条をめぐらせ、その下から3条が1単位となる弧状の沈線文を施し、さらにその下に垂下する6条1束の沈線文が施文されている。施文単位を観察すると、3本が1束となった櫛状の施文具を用いているものと思われる。器面調整は外面がミガキで内面はナデである。胎土には白色・透明・灰色・赤色の各種の鉱物を含んでいるが、粒子は比較的細かい。色調は、外面がにぶい黄橙色で、内面は灰色を呈している。いわゆる下城式系の壺の範疇でとらえられるものであり、中期前半に位置付けられよう。248は口縁部が大きく外反する、いわゆる広口壺である。極端にしまった頸部から胴部がおおきく膨らむ形態をなすものと思われるが、胴部下半を欠いている。全体に摩滅が著しく、表面が剥落しているため頸部外面のハケメを部分的にしか観察することができない。胴部外面には部分的ながら、ミガキが認められる。胎土の砂粒は比較的細かく、色調は黄橙色を呈する。須玖Ⅰ式から同Ⅱ式にかけての壺に相当する。

243は脚台付きの鉢であろうか。胎土にはキンウンモを含み、色調は褐色を呈する。

弥生時代後期の土器（図98～101）

図98～101には包含層（V・VI層が主体で、ごく一部がVIIa層）から出土した弥生時代後期の土器を図示した。なお、中には弥生時代終末～古墳時代初頭に所属すると思われるものも含まれているが、該期の土器は、各器種の一つの属性だけで時期を明言することは危険なので、一括してここで取り扱うこととする。

249～281は甕である。他の器種にも共通することではあるが、胎土には大きめの砂粒を多く含み、色調は浅黄橙色、橙色、灰白色などがある。口縁部はS字状に外反するもの（249～255・257・259～265）と「く」の字に外反するもの（256・266・267）があり、前者はさらに口縁部が強く外反するもの（249～255・257・259・260・262）と、ゆるやかに立ち上がるもの（261・263～265）とに分けることができる。

252は胴部が膨らんで、頸部がしまりゆるやかにS字状をなして口縁部が外反する。器面調整は一部にハケ

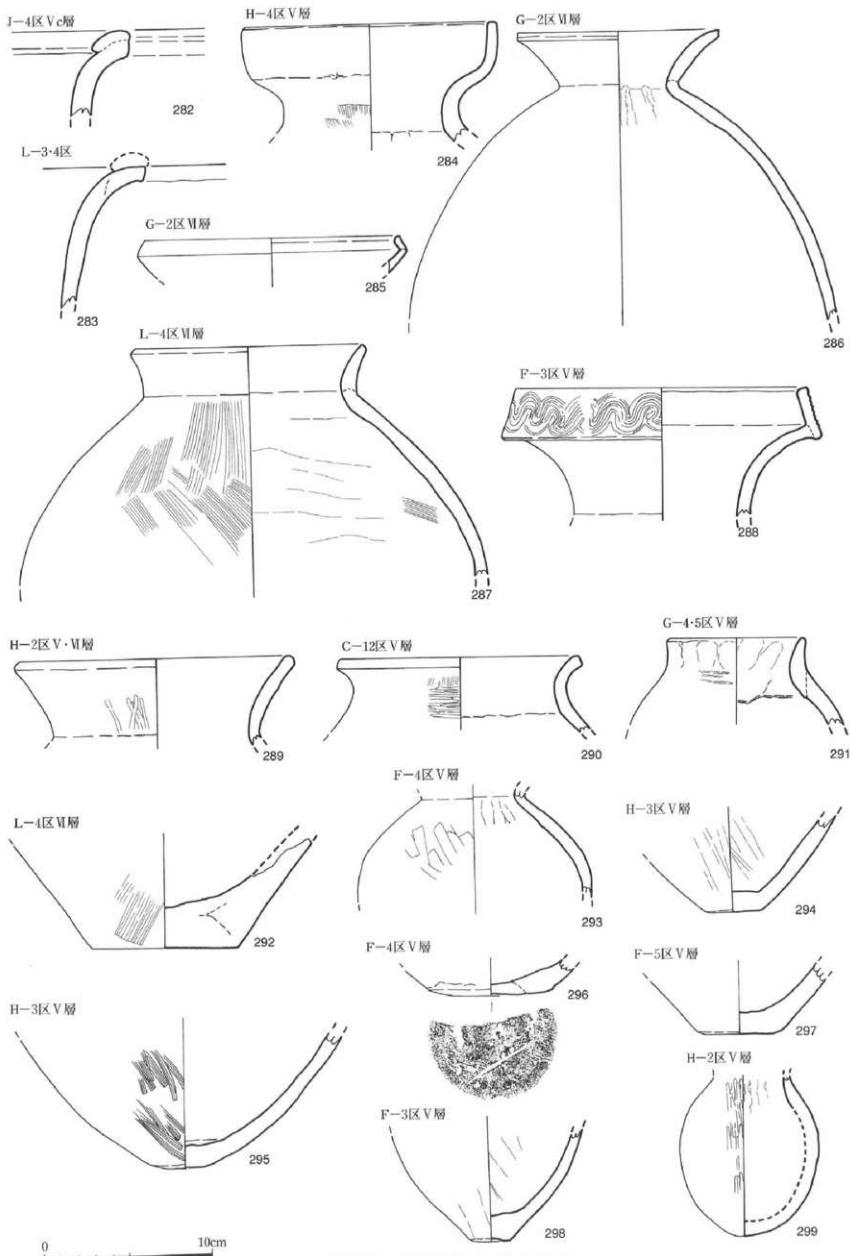


図100 坂元B遺跡 弥生土器

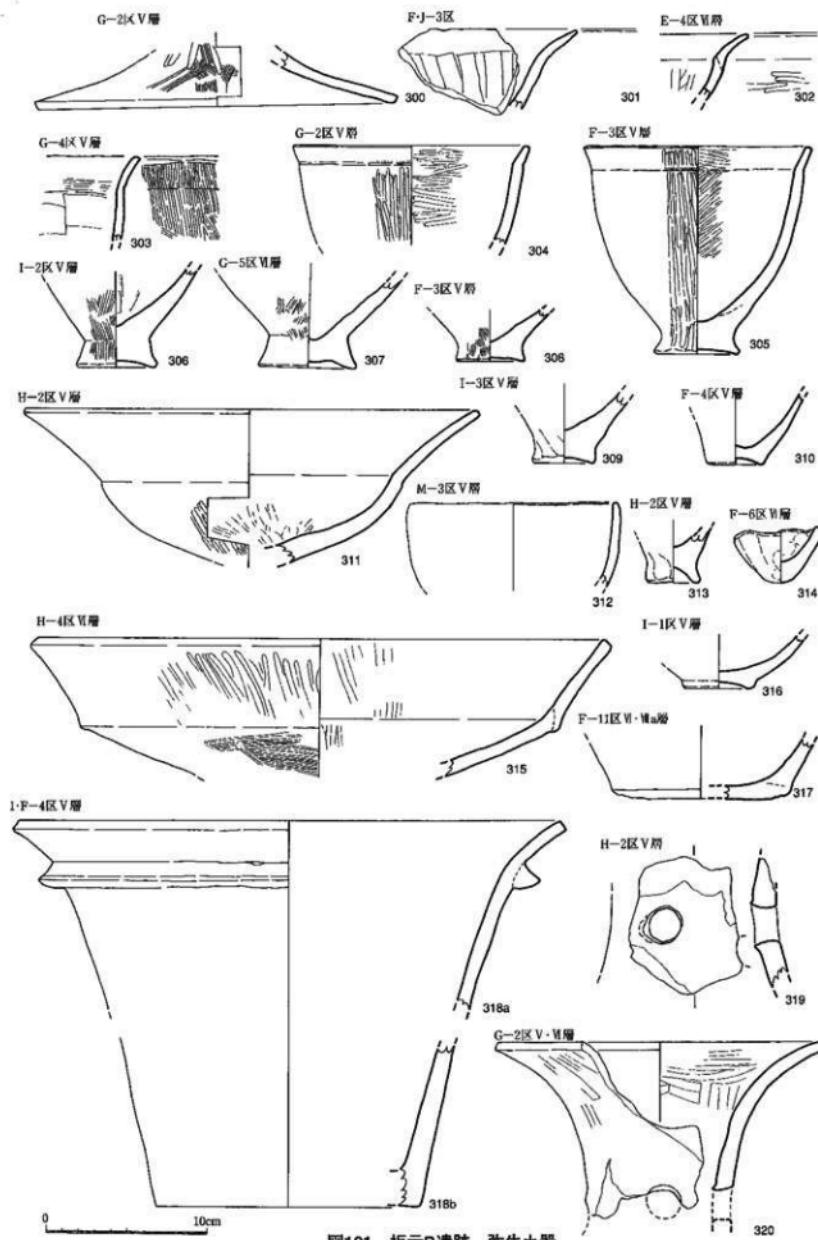


図101 坂元B遺跡 弥生土器

メが認められる。253は頸部内面が内側に突出して稜をなし、口縁部が直線的に外反する。器面調整は、内面にハケメが施されるが、外面には叩き状の工具痕が観察される。254は頸部外面に工具の端部を押し当てて口縁部の外反を作り出している。口縁部内面に指オサエ痕がある。同じような頸部外面の工具痕は、256や259にも認められる。255は他と比べて比較的厚手の土器で、口縁部径に対して、胴部最大径が大きくなることが予想されるため、蓋の可能性もある。器外面の調整はあらく、シワ状の細かいひび割れが多数入る。口縁部が長くなる261は外面に横方向の叩き状の工具痕が認められる。やはり口縁部が長く、ゆるやかに立ち上がる265は、頸部にはわずかな段がつく。弥生時代終末～古墳時代初頭の壺の特徴を有している。

268～281は壺の底部である。上げ底状となるもの（268～275）、平底で底部外端が張り出すもの（276～279）、底面がレンズ状に突出して不安定なもの（280・281）の3つの形態がある。280と281の外面には叩き状の工具痕が認められるが、器壁は概して厚い。また、281の底面には木葉痕が観察される。

282～299は壺である。282と283は同一個体と考えられる。口縁部内側にはカマボコ状の粘土帯を貼り付けている。283はその接合部が剥離している。284はいわゆる袋状口縁壺と考えられるが、口縁部の内灣は弱く、直線的に立ち上がる。頸部外面にハケメ調整が施されている。285は口縁部が稜をなして極端に内傾する。壺の口縁部を考えたが、詳細は不明である。286と287は口縁部が単純に外反する壺である。286の口唇部はへこむ。288は、すでに豊穴住跡のSA2の頃で触れたが、同遺構出土の135の口縁部である可能性がある。いわゆる複合口縁であり、口縁部外面に櫛描波状文が施されている。291は口縁部の短い壺であり、頸部内面の接合痕と口縁部内外面の指オサエ痕が明瞭である。口縁部外面にはシワ状の細かいひび割れが多数入る。299は小形壺であり、口縁部を欠く。形態は卵形を呈する。外面には縦方向のミガキが施され、頸部内面にはしづり痕が明瞭である。

292・294～298は壺の底部と考えられる。

300は高杯の脚部の可能性もあるが、器面にススが付着していることを考慮すると、壺の蓋の可能性も考えられる。外面裾部はハケメ調整の後に部分的なミガキが施されている。

301～312は鉢である。301・302・311は浅鉢と考えられる。311は底部先端を欠いているが、尖底状か小さな平底が予想される。器面調整は、胴部外面に縦方向のミガキが認められ、内面にも部分的にミガキが観察される。303と306は同一個体の可能性が高い。外面にはハケメ調整が顕著である。底部は充実した脚台となる。307の底部も306と同じような形態である。304と305は同じタイプの鉢であり、器面調整は外面が縦方向の、内面が横・斜め方向の丁寧なミガキが施されている。304は外面にタール状の黒色物質の付着が認められる。

313・314はミニチュア土器である。313は壺か鉢のミニチュアであると考えられる。314は小杯状を呈し、指オサエの痕跡が明瞭である。

315は高杯である。大きく広がる杯部は中ほどで稜をなし、口縁部は直線的に外傾する。器面調整は口縁部外面には縦方向のミガキが観察されるが、以下は横方向のハケメである。

316と317は器種不明である。316は底部に高台状の粘土の貼り付けがある鉢であろうか。317は底面が下方にレンズ状に膨らむ。鉢か壺の底部であろう。

318aと318bは、胎土・色調が酷似するため、同一個体と思われる。接合はできなかったが、図上で復元すると、外反する口縁部のやや下に鈍状突起がめぐり、胴部は直線的に外傾し、底部は平底となる、いわゆる深鉢ともいべき器形をなしている。胎土には径3mmを越える灰色・白色・赤色の砂粒が多く含み、器壁はもろく、剥落しやすい。橙色を呈し、ススの付着は認められない。

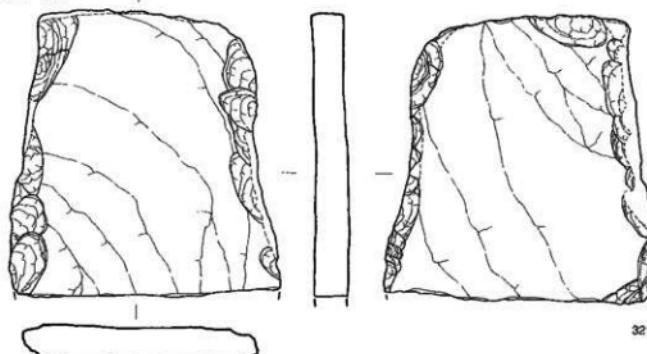
319・320は器台である。いずれも円形のすかしがあるが、全形を復元できることはできなかった。320は口縁部と思われる。器面調整は工具によるナデである。

5. 包含層出土の縄文時代～弥生時代の石器（図102～107）

ここでは、包含層出土の石器の中で、縄文時代～弥生時代と思われるものをとりあげて解説する。Ⅶa層から出土したものは、同層から出土した縄文時代後期～晩期の土器に共伴する可能性があるため、地区・土層を明記した。また、同様にⅧ層から出土したものは弥生時代の石器と認定できる可能性がある。

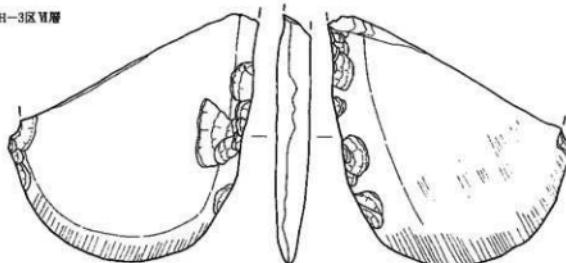
しかしながら、縄文時代と弥生時代の石器の岐別が困難であったことと、本来、縄文時代や弥生時代に所属すると思われる石器が上層のⅤ層やⅢ・Ⅱ層でも見つかっており、その後の擾乱による移動が想定されるケースも少なからずあったこと、そして反対に、Ⅴ層及びより上層から出土した石器の中には、平安時代～中世のものではないという確証を得ることが難しいケースもあったこと（例えば、砂岩礫などを利用した砥石など、その石器だけでは時期の判定に苦慮した。）などを考慮した結果、Ⅶa層とⅧ層から出土したものを

J-3区Ⅵ-Ⅶa層



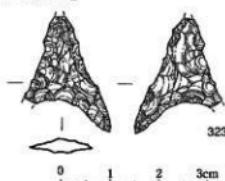
321

H-3区Ⅶ層



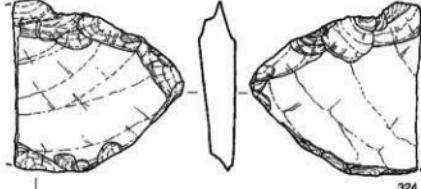
322

C-10区Ⅷa層



323

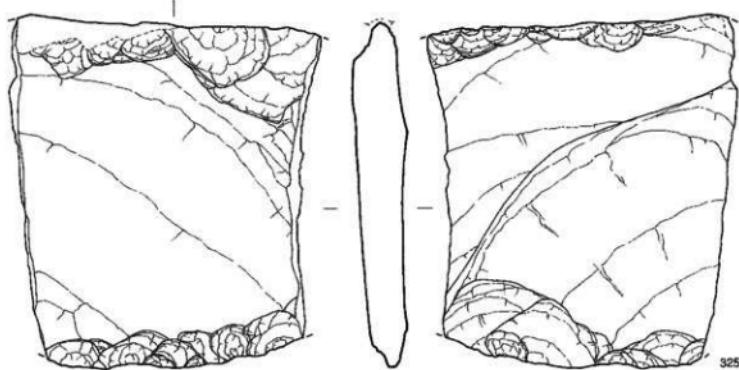
I-4区Ⅷa層



324

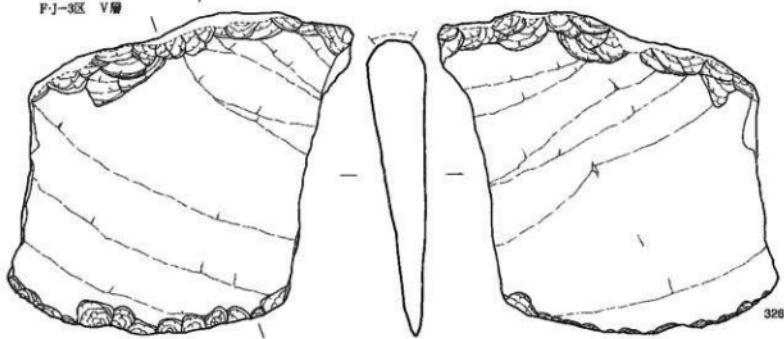
図102 坂元B遺跡 石器

M-4区 Vb層



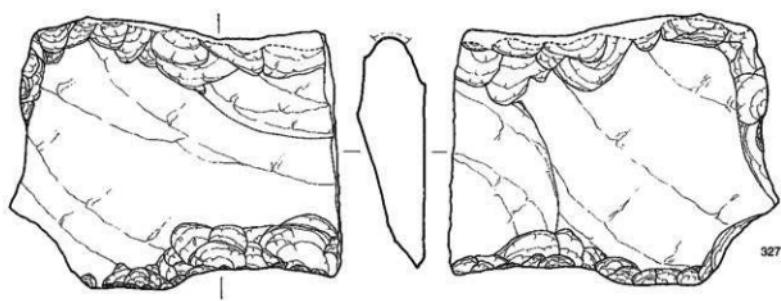
325

P-J-3区 V層



326

I-2区 VIa層

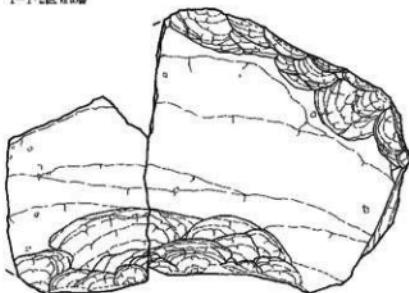


327

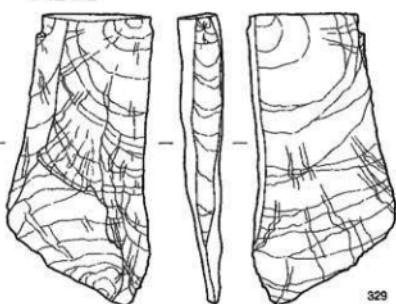
0 10cm

図103 坂元B遺跡 石器

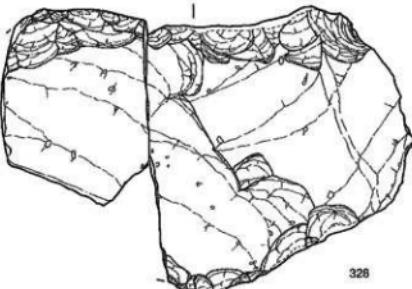
I-1・2区 VI a層



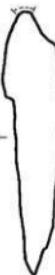
I-3区 VII a層



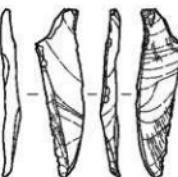
329



328

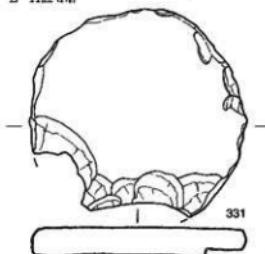


J-2区 VII a層



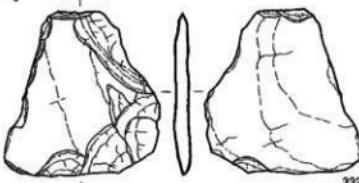
330

E-11区 VII a層



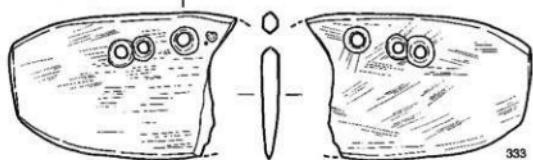
331

I-5区 VII a層



332

G-2区 V層



333

図104 坂元B遺跡 石器

一応の基準として、より上位の層で出土したものは、それらとの照らし合わせによって判断した。

以下、縄文時代～弥生時代という時期幅でとらえられるものについて器種ごとに解説する。

打製石斧（打製土掘り具）

321はJ-3区のVI層とVIIa層の境界で出土した。横長の剥片を利用しており、側縁部を剥離した後、敲打を加えてつぶしている。基部と刃部を折損しているが、基部には、割れ口のエッジに磨耗痕が観察される。現存長約8.7cmであり、幅8.3～6.5cm、厚さ約1.1cm、現存重量161.4g。岡輝石安山岩、類製である。

322はH-3区のVI層から出土した。刃部以外を折損している。側縁部は剥離によって整えられる。刃部全

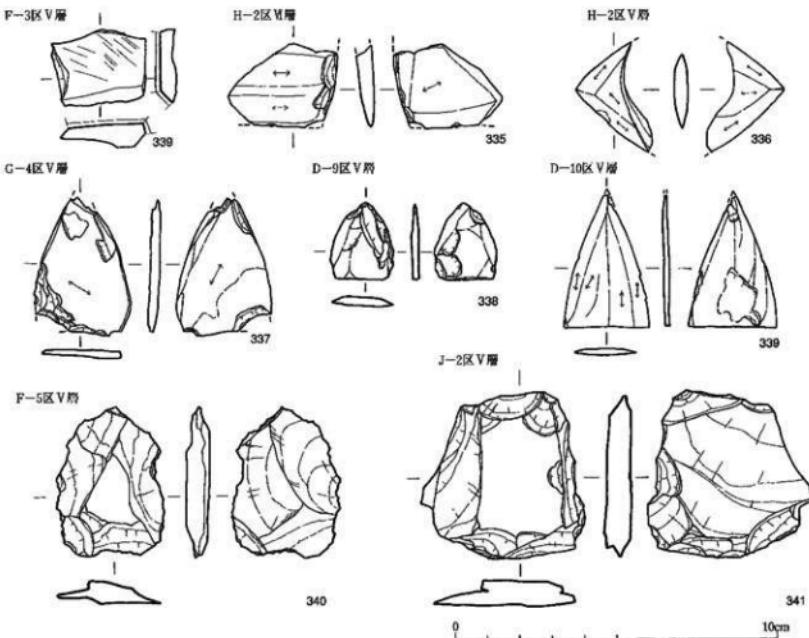


図105 坂元B遺跡 石器

体が使用による摩滅のためか研磨されたようになっている。刃縁部には斜め方向の線状痕が観察されるため、これが土掘り具であれば、使用方向は地面に対して垂直ではなく、斜め方向に突き刺していたことを示しているのではないかと推測される。現存長約7.7cm、厚さ約1.1cm、現存重量69.9g。頁岩源ホルンフェルス製。

打製石鏟

323はC-10区のⅤa層から出土した。凹基式であるが、先端と基部の一部を欠損している。両側からの剥離によって、比較的細身の形態をなす。現存長約2.4cm、現存重量0.7g。無斑品安山岩製。

剥片石器

剥片の側縁等に剥離を加えて、刃部を形成するものを一括した(324・325・326・327・328・332)。

324はL-4区のⅣa層から出土した。半分を欠損しているものと思われる。打製石斧の破損品を再加工した可能性がある。現存重量36.9g。灰色の頁岩源ホルンフェルス製。332はI-5区のⅣa層から出土した。打製石斧の小形品とも考えられるが、かなり薄手(厚さ約4mm)であることから、これも324と同じように、打製石斧などの破損品を再加工した剥片石器の可能性を示しておく。現存長約4.8cm、現存重量13.1g。風化の進んで浅黄色を呈する(風化のためきな粉をまぶしたような状態)頁岩源ホルンフェルス製。325~328には素材と製作技法に共通する特徴がある。すなわち、手のひら大の横長剥片を素材として、両方の側縁部を剥離によって調整した後、片方の側縁を敲打によってつぶすというものである。また、石材もすべて、両輝石安山岩a類(高之峯・母智丘産)といいうゴツゴツした石を使用している。325は実測図の左右両端が欠損しているように見えるが、意図的に折り取っている可能性もある。刃縁の一部が火を受けている。重さ290g。326は刃部断面形が比較的シャープである。やはり実測図の左右両端が折り取られたようになっている。高倍率の金属顕微鏡を用いて観察した結果、イネ科植物を対象として使用したときに生じるバッヂ(水滴)状光

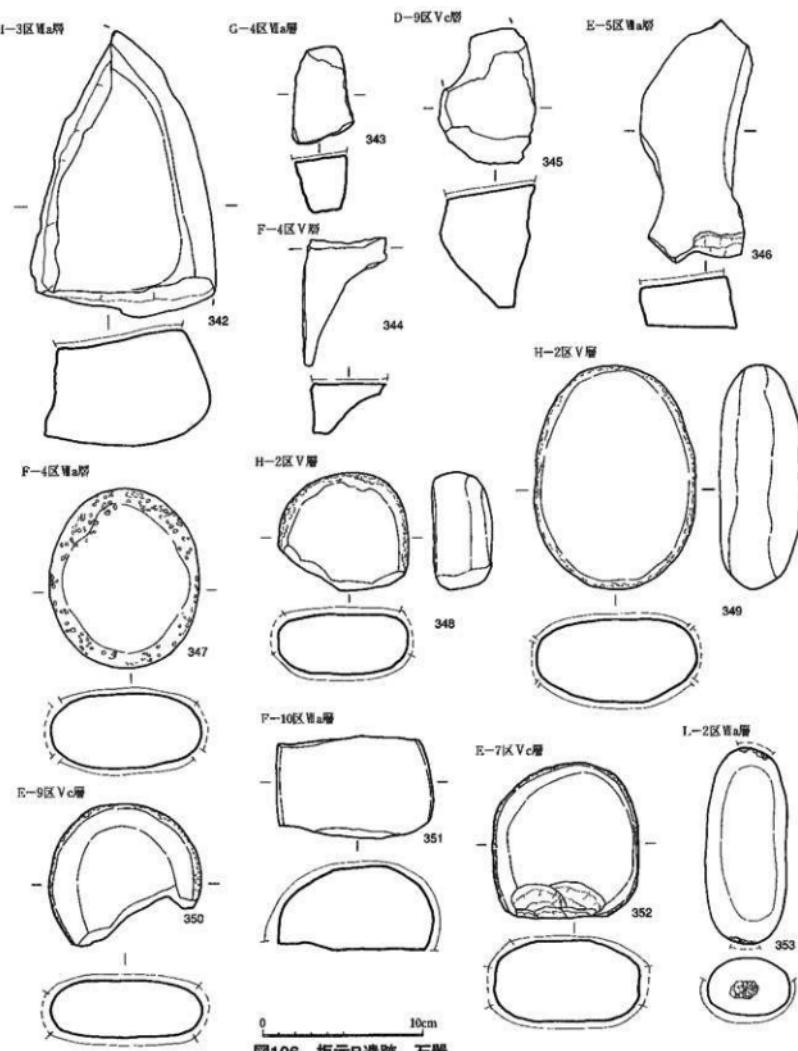


図106 坂元B遺跡 石器

沢斑は認められなかった。重さ220g。327はI-2区のVa層から出土した。実測図左面の右端が折り取られたようになっている。重さ250g。326と327の背部の敲打は入念に行われており、完全につぶされている。

328はI-1区とI-2区のVa層から2つに割れて出土したものを接合した。実測図下面の左下隅を欠損している。刃部の平面形は外彎している。反対側の背部にあたる部分のつぶしは顕著ではなく、使用によるとみられる磨耗が認められる。325~327とは機能が異なるのかもしれない。現存重量240g。

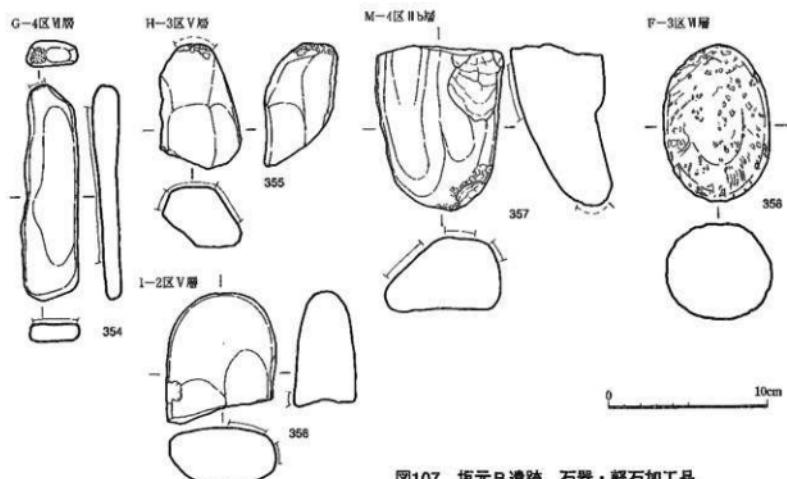


図107 坂元B遺跡 石器・軽石加工品

使用痕のある剥片

329はI-3区のVIa層から出土した。重さ56.4g。細粒砂岩製。330はJ-2区のVIa層から出土した。側縁部に微細な剥離が認められる。無斑晶安山岩製。重さ3.7g。

円盤形石器

331はE-11区のVI層から出土した。一部を欠損している。周縁部は敲打あるいは使用によって丸みを帯び、摩滅している。径約6.5cm、厚さ約8mm。重さ49.1g。ややきめの細かい両輝石安山岩類a製である。

砥石

334は小形の砥石である。灰色の凝灰質頁岩製。重さ6.2g。354~357はすべて細粒砂岩製の比較的大形の砥石であるが、一部に敲打痕をもつもの(354・355・357)もある。357は重さ354gである。

磨製石庖丁

333・335・336は石庖丁の欠損品である。いずれも黒色の頁岩製である。333は平面形方形状を呈し、3つの穿孔と未貫通の穴が2つある。336は平面形外彎刃外彎背の石庖丁の側縁部と考えたが、磨製石鎌か磨製石剣の先端部の可能性もある。硬質の頁岩製である。

磨製石鎌

339は磨製石鎌である。長さ約4cm、重さ3.2g。灰色の頁岩製。緑灰色を呈する凝灰質頁岩(緑色珪質頁岩)製の338(1.6g)と黒色の頁岩製の337(5.4g)は、いずれも研磨が不十分であることから、石鎌の未製品と思われる。340(10.5g)・341(25.6g)は黒色の頁岩製剥片であるが、いずれも研磨工程に入る前の磨製石鎌の素材であると思われる。

石皿

342~346は石皿と思われる。342はI-3区VIa層から出土した。欠損しているが、割れ口は磨耗しており、破損後も使用していたものと考えられる。中粒砂岩製で重さ1.89kg。343~346は大半を欠損している。砂岩製の343はG-4区VIa層から出土した。石皿とするには疑問も残る344・345・346は、すべて両輝石安山岩a類である。

磨石・敲石

347~352は磨石であるが、敲石の機能をあわせもつもの(347~350・352)もある。349(720g)が両輝

右安山岩 b 類（霧島新期溶岩類）で、352（730g）が
両輝石安山岩 a 類の他はすべて砂岩製である。

347（760g）は F-4 区Ⅵ a 層から出土した。351
は F-10 区Ⅶ a 層から出土した。半分を欠損している。

353 は棒状の敲石である。L-2 区Ⅶ a 層出土。両
端に使用痕あり。全長約 12.2cm、重さ 310g。砂岩製。

軽石加工品

358 は軽石加工品であり、全面が研磨されている。重さ 146.6g。

6. 包含層出土の古墳時代の土器

西プロックの V 層からは古墳時代に所属するとみられる土器が 2 点出土した。359 は平安時代の甕の可能性も考えたが、内面の調整技法と胎土から、古墳時代後期のものと判断した。明赤褐色を呈し、器面調整はナデである。外面にはススが付着する。360 は須恵器の杯蓋である。天井部に擬宝珠状のつまみをもち、かえりは下方に突出する。胎土にはセキエイと思われる白色鉱物を含み、暗青灰色を呈する。7 世紀前半代。

(2) 平安時代～中世

基本層序の項で述べたように、平安時代の遺構の埋土は基本土層の V c 層に、中世前期の遺構の埋土は、
V a 層・V b 層・IV 層（桜島文鏡石）に対応すると考えられる。しかしながら、実際に調査を進める中では、土層断面において基本層序との関係を明確にできる遺構の場合を除けば、遺構内堆積土をどの細分層に

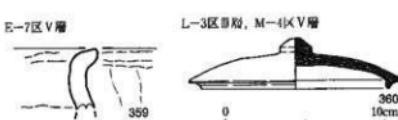


図108 坂元B遺跡 古墳時代の土器



平安時代の遺構分布



図109 坂元B遺跡 平安時代～中世の遺構分布

相当させるかの判断は困難であった。したがって、出土遺物の時期、切り合いを含めた遺構の配置状況などの総合的な判断に基づいて時期を認定することに努めた。その結果、平安時代の造構と中世前期の造構とを時期を分けて図示したのが図109である。しかしながら、掘立柱建物跡などの一部には不確実なものも含まれており、時期認定が万全であるとは言えない。したがって、ここでは、平安時代から中世までを一括して、造構ごとに解説を加え、時期については、言及できるものについて、個別にその年代と根拠を付記した。

1. 溝状造構

SD2は、西プロックを中心として検出された(図68)。検出面の等高線標高146mのラインに沿って東西一東北方向に弧状をなして走行し、東プロックの西端に向けて折れ、調査区域外へとのびる。南端はL・M・3区で検出した浅い谷に接続している。幅90~60cm、深さ48~18cmで、調査区域内での総延長は約73mである。断面形は、U字状あるいは逆台形状であるが、部分的に立ち上がりが不明瞭となる。埋土は黒褐色弱粘質シルト土の單一であり、場所によってはより褐色味が強くなるところがある(図110)。出土遺物は、土器に関しては小破片が多く、弥生時代後期の土器と平安時代の土器(361~363)などがある(図111)。埋没時期は平安時代と考えているが、出土遺物は弥生土器の破片の方が多い。361は七頭器杯である。橙色を呈する。362は高台付椀の底部と思われる。灰白色を呈する。363は土師器甕の口縁部で橙色を呈する。内面はケズリ調整である。外面にススが付着する。他に磁石(364)も出土した。364は、H-1区のVc層から出土した破片と接合した。石材は中にキラキラした微粒子の鉱物を含む細粒砂岩製であり、表面と側面が砥面となる。重さ178.5g。

SD3とSD4は、西プロックのH・I-5区で検出された比較的浅い溝状造構である(図68)。両者ともに南北方向に走行する。配置状況から考えると、同時期における一連の造構であると考えられる。

SD3は幅約67cm、深さ約15cmで、断面形は逆台形状となる(図110)。遺物は土師器が数点出土している。図化できたものとしては、365・366の土師器甕を提示した(図111)。いずれもにぶい褐色を呈する。365の内面はケズリ調整である。

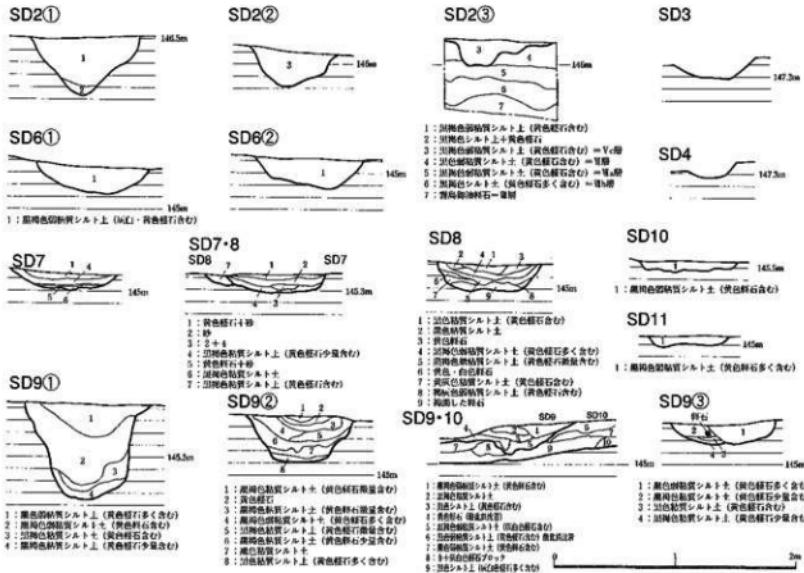


図110 坂元B遺跡 平安時代～中世の溝状造構断面図

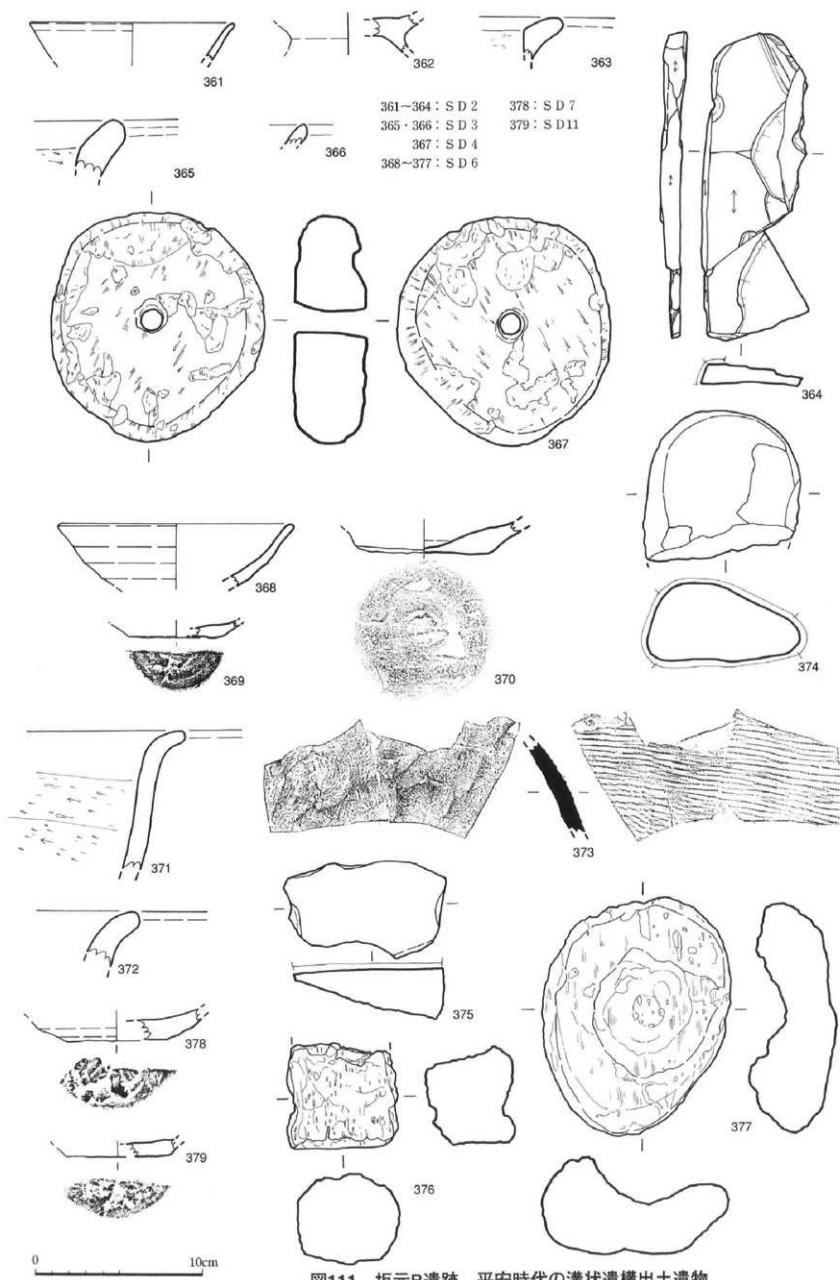


図111 坂元B遺跡 平安時代の溝状構造出土遺物